
東方地帝馬 ～地の帝王、幻想郷へ～

モヤシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方地帝馬 ～地の帝王、幻想郷へ～

【Nコード】

N3385U

【作者名】

モヤシ

【あらすじ】

オルフェノクの王との最後の決戦。その戦いでホースオルフェノク「木場勇治」は死んだ筈だった。

しかし乾巧は、戦いの後に気付く。戦った後の場所には、オルフェノクが死んだとは思えないほど少量の灰しか落ちていない事に。一方、その木場勇治は幻想郷に現れるが、木場勇治の近くには見た事のない金色のベルトが落ちていた。幻想郷に現れるオルフェノク達人を守るために木場勇治は、再び戦いに身を投じる。初投稿作品となります。至らぬ点もございますが、宜しく願います。

紅い館と灰色の馬（前書き）

はじめまして。某破壊者の名前からとった、モヤシです

初投稿です。キャラの性格、口調などに違和感があるかも知れませ
ん。

文才が無い上に、東方新参もい所の人間が書く幻想入り小説です
が、どうか、宜しくお願いします。

紅い館と灰色の馬

たった1つの事故から、幸せだったある男の人生が狂った。

その事故以来、男は2年間眠り続け、死んだ。しかし、有り得ない事に、その男は生き返ったのだ。

生き返った男には、異形の力が宿っていた。しかも、眠り続けている間に身の周りの何もかもが変わっていた。信じていた人にも裏切られた。

そして異形の力を使い、自分を裏切ったその人達を、殺した。

彼は苦悩した、異形になってしまった事、罪を犯してしまったことを。

そんな彼は、自分と同じ異形の力を持つ仲間を得た。彼は思った、異形の力を持つていても、心が人ならば人なのだ。そして理想が生まれた。自分達のような異形と、人との共存という理想が。

しかし、その仲間は、人に殺された。それは間違いないのだが、彼は人が殺したと思った。人に絶望した彼は、異形の王を復活させ、人を滅ぼそうとした。

彼はかつての友と争った。そして負け、かつて自分が抱いた理想に気付かされた。

彼は異形の王に2人の戦士と共に戦いを挑んだ。そしてそこで、王を倒す為に、自分の命を投げ出した。

こうして、彼の人生は終わりを告げた……かに見えた。しかし彼は今…。

「あ、勇治さん」

此処は紅魔館。その門番をしている「紅 美鈴」が、自分の方に向かってくる男性に声をかけた。

「やあ、美鈴ちゃん」

その男の名は「木場 勇治」そう、異形の力を持つ男性である。

「どうしたんですか？」

「咲夜ちゃんに言われたんだよ。居眠りしてないか見てきて欲しいって」

美鈴は、門番でありながら居眠りすることがある。木場もそれは門番としてどうなのかと思ったが、咲夜曰く「よくある事」「らしいので、気にしない事になっている。」

「あはは…今はすっかりやってますよ」

「…今は？」

今は、という事は、自分がすっかりやっていない時もある、と少しは自覚があるのだろうか？

「私が眠ってしまうのは、このポカポカとした陽気が悪いんです」

「その理屈って、罷り通るのかな？」

苦笑いしながら言う木場。美鈴は本当にそう思っているのか、それとも冗談なのか、それは木場には分からない。

「まあ、真面目にやってる、って言うっておくよ」

そう言って木場は紅魔館の中に戻っていった。

「どうでしたか、美鈴は」

「うん、しっかり仕事をしてたよ」

紅魔館の館内に戻り、レミリアの傍にいた咲夜に早速、美鈴は門番として働いているかを聞かれた。

「…そうですね。それならいいんです」

それだけ聞くと咲夜は黙った。咲夜はメイド、木場は執事として、レミリアについていく。

何故、木場勇治が此処にいるのか、話は数日前に遡る。

「ん…？」

木場が目覚めてまず目にしたのは、何処かの天井。どうやら自分は、何処か知らない場所の寝室で眠っていたようだ。

「俺は…」

木場は眠る前の事を思い出す。「乾巧」「三原修二」「海堂直也」と共にオルフェノクの王に戦いを挑んだ。そこで木場は、オルフェノクの王に止めを刺す隙を作る為に、自分自身の命を投げ出し、身を散らせた…。

木場の頭に蘇るのは、ファイズがオルフェノクの王と自分に眩い光と共に蹴りを放つ光景。

その事を思い出し、あの後、オルフェノクの王を倒し、皆幸せになれたのかと思う。しかし、木場はそこで気付く。自分が乾巧にしてしまった事を。

簡単に言えば、元々短い彼の寿命をさらに縮める事をしてしまったのだ。

その事に、大きな罪悪感を感じる木場。が、もう1つの事に気付く。

「…ん？」

おかしい。オルフェノクの王との戦いの時、既に自分の体からは青い炎が上がっていた。それに、そこにファイズの蹴りを受けたのだから、普通ならば死んでいる。

何故自分は生きているのか、此処が所謂「あの世」という場所なら話は別だが…。

そんな考えが頭の中を駆け巡っていた。そんな時、寝室の扉が開いた。

「あ、お目覚めになりましたか」

メイドと呼ぶに相応しい姿をした少女が、寝室に入ってきた。

「…ええつと…誰…？」

何故自分が生きているのか、そもそも此処が何処なのか、それすらも把握できていない木場は戸惑いながらも、少女に話しかける。少女は、寝室の扉を閉め、木場の寝ているベッドに近寄り、質問に答えた。

「私は十六夜咲夜と申します。貴方が此処の門の前で倒れていたのを門番が見つけたので、門番に手伝ってもらい、此処まで運び込みました。貴方の所有物と思われるものも一緒に」

「…所有物？」

門番がいたりするような所なんて、木場は見た事もない。お金持ちの人の家なのかな？と思いつつ、自分の所有物について考える。思いつくのは、今着ている服。それはオルフェノクの王と戦った時の服と同じ。カイザギアも思いついたが、あれはオルフェノクの王に破壊された筈だ。所有物ってどんなものでしたか？と、木場が咲夜に問う。

「あなたの寝ているベッドの横のテーブルに置いてあるものですよ」

自分が向いている方にはテーブルが無いようなので、反対側を向く。反対側には咲夜の言う様に、テーブルがあり、その上に、何かが置いてあった。

それはよく見ると、見慣れたベルトと携帯の形をしていた。

つい最近まで自分と、2人の仲間が使っていた、戦士に変わる為のツールだった。

テーブルまでは、ベッドから出なくても手が届きそうなので、手を伸ばし、ベルトと携帯を手取る。携帯は折り畳み型だ。木場の知るギアは、ファイズ、カイザ、デルタの3つ。その中で、折り畳み型の携帯はファイズのみ。しかし、ファイズフォンとは違うミッシェンメモリーがそれには取り付けられていた。ギリシャ文字の「」を思わせるメモリー。ベルトを見れば、ファイズは赤と銀のベルトだったのに対し、このベルトは金が目に付く。カイザは金、というよりも黄色だし、携帯は回転式だった筈だ。第一、カイザギアは破壊された筈だ。デルタはそもそも、こういうタイプの携帯ではない。それからもう一つ、ライオトルーパーという量産型の物があるのだ

が、その変身方法は携帯ですらない。

つまりこれは、木場の知るどのギアでもないという事だ。

木場は、ギアを開発した「スマートブレイン」という会社の社長になつた事もある人物だ。

全てのギアについても把握していたつもりだった。それに、自分達の知らないギアがあるのなら、スマートブレイン前社長である「村上 峽児」が必ず狙うだろう。しかし、このベルトの事は、スマートブレインの情報を殆ど知っているであろう、木場ですら知らないのだ。

「…何なんだ…このベルトは…」

「貴方の物では無いのですか？」

「…いや、これと似たようなものは幾つか知っているんだけど…これは始めて見るかな」

木場は携帯の画面を見つめる。画面には変身コードが記されている筈だ。そして木場が見つけた変身コードは、自分が知る「555」でも「913」でも無かつた。

「0…0…0？」

自分の知らないベルトに疑問を持ちながらも、木場は携帯を閉じ、ベルトと携帯をテーブルの上に戻した。

「…ところで、此処は何処なんですか？」

ベルトの事は後にしよう。そう考え、咲夜に話しかける木場。

「此処は幻想郷の紅魔館です」

「幻想郷…？紅魔館…？聞いたことない場所だ…」

首を傾げる木場に、咲夜は自分の考えが当たっていた、という風な声を上げる。

「…やはり、外来人ですか」

「…えーっと…日本人だけど」

とりあえず、木場はこう答える以外には思いつかなかった。

「はあ…とりあえず、説明をさせて頂きますね」

〈少女説明中〉

「神様や妖怪か…何だか信じられない話だ」

自分がいたのとは別の世界。にわかには信じがたい話だろう。

「それが普通です。むしろ、外の世界の人間がこの話を信じる事が珍しいですよ」

「うーん…それでも、俺がいた世界もそんな感じだったから、信じれないわけでも無いかな」

木場の頭に浮かぶのは、自分の仲間、オルフェノク、ベルトの事。普通の人が聞いたら絶対に信じられないような事ばかりだ。

「…それにしても、羨ましいなあ、この世界は」

「羨ましい？」

木場の口から唐突に出た言葉に首を傾げる咲夜。何が羨ましいのだろうか。

「あ、いや、何でもないよ」

笑って言う木場だが、一瞬だけ、とても悲しそうな顔をしていた。この世界は、人間と妖怪や、他の種族が共存しているという。共存。自分が夢見てきたものだ。オルフェノクと人間の共存を望んでいた木場にとって、他の種族と人間が共存しているこの世界は、とても羨ましかったのだ。

「あら、目が覚めたのね？」

唐突にも、またもや扉が開いた。

今度現れたのはまだ10もいかないであろう少女であった。と言っても、木場にとってはそう見えるだけで、実は木場よりも遙かに年上なのだ。

背中には蝙蝠の羽を大きくしたような羽が生えていて、コスプレでも無い限り人間とは思えない。

「…君は？」

目の前にいる少女に尋ねる木場。

「私はこの館の主。レミリア・スカーレット。門番の美鈴が倒れている貴方を見つけたからそのままにしておくわけにもいかないでしょう？だからここまで運ばせたの」

「はあ…ありがとう…」

頭を下げたお礼を言う木場。だが頭の中では、こんな小さな女の子

が此処の主なんだ…という事は、此処にいる咲夜さんは使用人みたいなもの？どうみても年上なのに…。なんて考えていた。

「貴方は？」

「え？」

「貴方の名前」

そういえば先に入ってきた咲夜さんにすら自分の名前を言っていないことを思い出す。

「木場勇治。助けてくれてありがとうございます」

名前だけ言って、もう1度頭を下げてお礼をした。

「お礼はいいの、貴方が何であんな所で倒れていたのか、教えてくれないかしら？」

どうやらレミリアは木場が何故あんな所で倒れていたのかが気になっているようだ。

「…信じてもらえるかは分からないけど…」

木場は今まで自分の歩んできた道を話し始めた。オルフェノクの王との戦いまでの事を。

ベルトの事も今となっては大丈夫だろうと話した。が、自分が「オルフェノク」という怪人である事は伏せた。木場がオルフェノクという化物だと分かって、恐怖して欲しくなかったからだ。説明をするとレミリアは興味が湧いたようで、目を少し輝かせながら言った。

「へえ…じゃあ何で幻想郷に来て、倒れていたのかは覚えてないのね？」

「うん、本当なら、あの時…」

オルフェノクの王との戦いで自分は死んだ筈だった。いや、自分の最後など確認できるはずも無いのだから、死ぬのだろうと思っていた、というのが正しいのだが。

「何で…俺は…」

自分の手を見ながら、手を1度握り、開く。その手は、灰になる兆候すら見られなかった。

同じ頃、幻想郷の「外の世界」

そこにある「西洋洗濯舗 菊池」

1人の青年が、ソファに腰掛けて考え事をしていた。自分の夢を見つけ、寿命も残り少ないだろうと思いつつも、オルフェノクでありながら人間として生きている「乾 巧」オルフェノクの王と戦った戦士の内の1人「ファイズ」だ。

「…わっかんねーな…」

オルフェノクの王に止めを刺したのは自分の、ファイズの放った一撃だ。

最後の最後で自分の友が作ってくれたチャンス。それはその友が王を押さえつけている間に王に止めを刺す。つまり、その友ごと王を倒すというものだった。

巧は覚悟を決め、最後の1撃を放ち、その友も絶命した筈だった。そう、筈だった。

だが巧には、気になる事があつた。

オルフェノクの王の遺体は灰にはならず、いつの間にか無くなつていた。もしかしたら影山冴子・ロブスターオルフェノクが何処かに運んだのかもしれない。

だがそうであつたとしても不思議だ。今まで巧が倒してきたオルフェノクは多くの灰を残して消滅する。が、木場とオルフェノクの王を倒した後には、オルフェノクが死んだとは思えないほど少量の灰しか無かつた。

木場は死んだ。その筈なのだが、後に残つた灰の量は明らかに少なすぎた。

その事が巧はどうも気になつていた。

「…考えてもわかんねえーか」

結論が出ないことが結論として出たので、巧は考えるのをやめた。だが何となく思つた「木場は何処かで生きているのではないか」と。

紅い館と灰色の馬（後書き）

木場勇治と金色の「あの」ベルトが幻想入りしました。

異常に説明が長くなってしまいました。それも私の実力不足です…。

なお、見てくれればわかるのですが、この小説内の木場勇治は「本編」の方の木場勇治であり、「パラダイスロスト」の木場勇治とは別人です。

金色のベルトについては、パラダイスロストの世界から来たと思っ
ていただいても、全く別の世界から来たと思っただいても構い
ません。ベルトについての説明は勿論作中ですが…。

こんなマシンガンで撃ち抜かれたように穴だらけの小説ですが、何
卒、宜しく願います。

大地の帝王（前書き）

どうも、某破壊者から名前を（r yのモヤシです。マゼンタ色ではありませんけど。

第2話です。

今回はオルフェノク出現です。

大地の帝王

木場が目覚めてから、1時間ほど経った紅魔館。

木場は体に異常が無いのだが、この幻想郷では行くところが無い。

そんな時、レミリアが此処に居候することを提案した。

行く当てのない木場は、その言葉に甘え、紅魔館で居候することになったのだが…。

「こんな服、俺に似合うのかなあ？」

木場が自分の今の服装を見ながら言う。

紅魔館の何処にあったのかは分からないが、簡潔に説明すると執事のような身なりをしていた。

「いい？これから貴方は紅魔館の執事よ」

レミリアが何故木場を執事にしたのか、それは単なる「退屈しのぎ」に他ならない。

オルフェノクの話はレミリアの興味を引くには十分なものだった。

その話が引き金となり、木場を此処に留めておこうと思ったのである。木場が居て何かが起こるとは限らないが、居た方が何か起こるかもしれない、というどこぞの巫女のようなレミリアの勘だった。

そんな事情を知るわけも無く、行く当ても無い木場は、執事になる事を条件に、此処に泊まる事となったのだ。

幻想郷に来て僅か数時間数分。木場は執事に任命された。その日は幻想郷に来る前の疲れもあり、それに夜も遅かったので、休んで1日を終えた。

次の日の朝。咲夜にこの紅魔館を案内してもらおうこととなった。咲夜が木場を先導して、紅魔館の通路を歩いている。

「随分広いんですね」

「ええ、ですから案内にもそれなりに時間がかかります」

この日はまだ朝の8時。そんな早くか館内を案内されるのなら、どれだけ広いのだろうと木場は考える。もしかしたらスマートブレインのビルよりも広いのかもしれない。

50分程度かけて、館内を見て回った後、木場と咲夜は地下に向かった。

上の階もあるし、1階だけでも相当広く、さらに地下まである。これだけ広いと、歩いて向かうのも時間がかかる場所が出てくるかなあ、と思う木場。

地下に向かう通路からは鼻を突くような異臭がした。その臭いはオルフエノクの体で五感が強化されている木場にとっては、普通の人間以上に辛いものだった。

咲夜は地下にある部屋の説明を始める。

「この先には大図書館があります。その大図書館をお嬢様のご友人である、パチュリー・ノーレッジ様が管理しておられます。今も大図書館にいますので、その方もご紹介させていただきます

ね

先に進み、地下にある扉を開けると、そこには巨大な本棚があった。1つではない、2つ、3つ、4つ…と、どれだけの本を集めればこれだけの本棚が全て埋まるのか分からない。外の世界にあった図書館よりも大きいんじゃないかと思えた。

しかもさらに信じ難いのは、本棚が宙に浮いている事だ。しかもその本棚までビツシリと本が置いてあった。

見渡す限りの本、本、本、本。これだけの本を見るのは木場にとって生まれて初めてだ。

奥に進むと、椅子に座って机に向かい、本を読んでいる紫色の髪をした少女がいた。

三日月のシンボルがある帽子を被った、10代ぐらいの少女。

その少女はこちらに振り向いた。気配でも察知したのだろうか。

パチュリーは木場の顔を見て、数秒思案顔になるが、すぐに納得したようで、木場に話しかけた。

「…ああ、見慣れない顔だと思ったら、貴方ね？昨日入った執事というのは。レミイから聞いたわ」

「あ、はい。始めまして、木場勇治です。…君が、パチュリー・ノレッジさん？」

「そうよ。木場勇治ね…名前は覚えたわ」

じつと木場を見ながら言うパチュリー。しかしすぐに読書に戻ってしまう。

自分達に背を向けて、机の方を見て本を読んでいるので、本に何が書いてあるかは木場にも見えていた、しかし、何処の、どんな文字なのかも分からない意味不明な字が書かれている。

「…次に参りましょう」

咲夜がそう言つて、大図書館の別の場所に歩いていく。

「いいの？パチュリーさんはあのまままで…」

「いつもの事ですから」

そうですか…と、とりあえずの納得をして、大図書館を見て回る。何処を見ても本だらけ。本棚だけでなく本そのものも浮いている。少し進むと、カウンターがあつた。

「此処つて…他の人も来るんですか？」

「いいえ、公開はされていませんが」

ならば何故カウンターがあるのか、紅魔館の中にいる誰か借りに来るのだろうか…と考えた。実は盗む、もとい、死ぬまで借りていくような人ならいる事を木場は知る由も無い。カウンターの近くには誰かがいた。

「あ、咲夜さん…と、そちらは…もしかして新しく入った執事さんですか？」

「木場勇治です、宜しく」

その少女の後頭部と背中からは蝙蝠の羽のようなものが生えていた。白と黒を基調とした服を着ていて、髪の毛は赤髪で、割と長い。

「彼女は小悪魔。この大図書館の司書をしてもらっています」

「小悪魔さんか…それじゃあ、これから宜しくお願いします」

木場が一礼すると小悪魔は微笑みながら言った。

「敬語なんていいですよ、もっとこう…友人と接するぐらいの感じでいいですよ」

「いや、でも、紅魔館や幻想郷の事は俺は全然わからないし、これからお世話になりますし…」

「いいんですよ。そうだ、図書館に来た時は、私に声をかけてください。パチユリー様は見ての通り本をずっと読んでいる時は話しかけても反応もあまりありませんから」

「分かりました…じゃなくて、分かったよ。じゃあまたね、小悪魔ちゃん」

敬語で無くていい、と小悪魔本人に言われたので木場は少し躊躇いながらも、敬語ではなく、普段の口調で話した。小悪魔は図書館を去る木場と咲夜を笑顔で見送った。

地下から1階に戻り、木場は先程から気になっていた事を咲夜に聞く。

「…ところで、さっきから何度も見るメイドさん達は？」

「ああ、妖精メイドの事ですか？説明は歩きながらしましょう」

妖精メイドの説明をしながら歩く咲夜。木場は聞きながら歩く。

妖精メイドはレミリアが雇った者達らしく、相当な数がいるそうだが、自分の世話で手一杯の為、掃除など、殆どの事は咲夜一人でやっているそうだ。

「大変なんですな、咲夜さんも」

「ええ、でも、もう慣れましたから」

ニコリとしながら言う咲夜。この広い館を自分1人で掃除し、レミアの世話全般までこなし、それを「慣れた」で片づけるこの人はどれだけ優秀なメイドなのだろうかと思う木場。秘書的立場としても、スマートレディよりも咲夜の方が優秀なのではないかと思う。

長い通路を歩き、今度は外に出る。最後に訪れたのは紅魔館の門。日は真上よりも少し傾いていて、もう昼も過ぎただろうという時間帯。朝から見て回っていて、この時間までかかったのだから、紅魔館の広さがよく分かる。

門には、1人、誰かが立っていた。後ろ姿ではっきりとは分からな
いが、長身の長い赤い髪をした女性。その女性の元に咲夜は向かい、
木場もそれについていく。

女性は咲夜と木場に気付いたらしく、木場達の方に明るい笑顔
を向けた。

「彼女は紅美鈴。紅魔館の門番です」

咲夜による紹介と同時に、美鈴は木場の方に一步步み寄る。

「紅美鈴です！いやー、あの時倒れていた人がまさか執事になる
なんて！これから宜しくお願いします！」

明るくそう言うと、美鈴は右手を差し出してきた。木場も笑顔で
手を差し出して応じ、2人は握手をした。手を上下に大げさに振る

美鈴。木場はその明るさから、元の世界で仲間だった菊池啓太郎を何となく思いだす。

「君が、倒れている俺を見つけてくれたんですね。ありがとうございます
ございます」

「いえいえ、放っておくわけにもいきませんでしたし。それと、堅
苦しいのは無しで話しましょう！敬語なんて使わずに！」

握手をしていた手を離しながら、美鈴はそう言った。

「えっと…うん、分かった。じゃあ宜しく、美鈴さん」

微笑みながら言う木場。木場にとって、自分をこんなにすんなりと受け入れてくれる存在は嬉しい以外の何者でもなかった。だが同時に、自分の異形、オルフェノクとしての姿を見せたら、自分はこんなにも明るく接している人を裏切るんじゃないかという考えが浮かぶ。しかしその暗い考えを木場は振り払った。この世界にいる以上、オルフェノクの力を使う必要は無いと思ったから。そんな事は杞憂に過ぎないと思ったからだ。

こうして一通り紅魔館の中を見て回った木場。その後も紅魔館のメンバーとは仲良く過ごし、周りを妖怪や特異な能力を持つ人に囲まれてこそいるものの、平和で平凡な生活を送っていた。

そして現在。その生活にも慣れてきた木場、冒頭の木場に至ったのである。

「ところでレミリアちゃん…お嬢様」

時々「レミリアちゃん」と呼びそうになるが、「お嬢様」と呼べと言われている。

咲夜ちゃんや美鈴ちゃんの方に敬語を使ってもそこまで違和感はないけど、見かけ年下のレミリアちゃん、もとい、お嬢様に敬語を使うほうが違和感があるんだけどなあ、と木場は思う。

「何？あと、私を呼ぶときはお嬢様よ？間違ってもレミリアちゃんなんて呼ぶんじゃないわよ？」

「あはは、分かってますよ。お嬢様、今から昼食…というよりお嬢様にとっては朝食ですが」

レミリアのように吸血鬼という種族は夜行性。つまり人間よりも日が出ている時に起きている時間は短く、日が落ちている時に起きている時間は長い。

もう昼から2時間近く過ぎているのだが、レミリアにとってはこれから朝食なのである。

「そうね、そろそろお腹も空いてきたし…食堂に行きましょうか」

そう言って木場と咲夜を引き連れて、レミリアは食堂に向かった。

昼食であり朝食である食事の時間。

目の前に並べられた食事を食べる木場。

食べている最中に、横から誰かが何か息を吹きかけているような「フー、フー」という音が聞こえてくる。

木場にとっては何故か聞いたことのあるような、懐かしい音だと思えた。

横を見ると、咲夜がコーヒークップを持ち、息を吹きかけてコーヒーを冷ましていた。

「フー、フー…」

それを見て、苦笑してしまう木場。

その反応に気付き咲夜はムツとした顔で木場の方を見てくる。

「猫舌だからってその反応は無いじゃないですか」

「いや、知り合いに猫舌がいるんだ」

微笑みながら言う木場。咲夜から目を離し、自身の目の前の食事を再び食べ始めるが、その顔は先程の微笑みからは考えられないほどの苦痛の表情を浮かべていた。

咲夜はその表情を見ていた。見ていて思った。その人との間に何か辛い事でもあったのだろうか。しかも相当な、自分が経験した事も無いような程辛い事が。

木場は思い出していた。乾巧とのすれ違いからの対決。友達にもなれたが、その後また誤解が生じ、結局敵対。その上自分は、ただでさえ短い彼の寿命をさらに縮めるような事をしてしまった。

思い出すだけで、あの時の自分は狂っていたんじゃないかと思う。

さらに数日、木場が幻想郷に来てから2週間、特に変化の無い毎日。木場もだんだんこの世界になれて行った。紅魔館の中は大体覚えたとし、咲夜に案内されて何度か行ったことのある人里でも人の良さから、すぐに住民から受け入れられた。

咲夜曰く「1人では時間を止めてなきややってられない仕事も、少し楽になった。それでも広いですから時間は今でも止めてやってますけど」との事。

ここまで何も起こっていなかった。平穩そのものの幻想郷。

そう、今日までは。

その日は晴天だった。清しい程の晴天。

紅魔館の通路を歩く咲夜と木場。まだ朝なので、レミリアはまだ寝ている時間帯。

そんな時だ。1人の妖精メイドが慌ててこちらに来たのは。

これが、木場勇治の新たな戦いの始まりだったのかもしれない。

「た、大変です！」

全力疾走をして疲れ果てたように息を切らしながらメイド妖精が叫ぶように言った。

「どうしたの？」

「敵襲です！現在美鈴さんが交戦中、他のメイド妖精も美鈴さんの援護をしていたのですが……」

そこまで言って言葉を発しなくなったメイド妖精。その顔は青く、言いたくない、という感情が表れていた。

「交戦中？弾幕ごっこではなくて？それに他のメイド妖精がどうなつたの？」

咲夜はあくまでも冷静に聞く。美鈴が戦っているのなら心配はない。気になるのは幻想郷で勝敗を決める際の「弾幕ごっこ」ではなく「交戦中」という言葉だった。交戦中とはつまり、「本当の戦い」をしているという事になるからである。

「…本当に戦っているんです。戦っていたメイド妖精達の内、数人は……………」

間を置いてメイド妖精が口を開いた。

「灰に…されました」

その言葉を聞き、咲夜は驚愕の表情を浮かべ、木場は眼を見開いた。

「…どひいひい」

どういう事？と咲夜が聞こうとした瞬間、木場が割って入った。

「君、他のメイド妖精を灰にしたのは、どんな奴だった？もしかして、灰色の人型の化物？」

メイド妖精の両肩に手を置いて、目線を合わせて聞いた。木場は「

灰になった」と聞き、一種の焦りがあつた。もしかしたらあいつ等が…という考えが過つたのだ。

「は、はい。その通りです…」

メイド妖精が何故知っているのですか？とでも言いたげな顔で言った。それを聞いた途端、木場は通路の方を見て、走り出そうとした。しかし

「待つてください」

咲夜が木場を呼びとめた。木場はその場で止まり、咲夜の方を向く。その顔には、焦りの表情が浮かんでいた。一刻も早くその化物の所に向かわなくては、そう思っているのだ。

「どうしてそんな化物の事を…それに、何故そんなに焦っているのですか？」

「…多分、その化物、俺が知っている奴だと思う。だから早くしないと…あいつ等の危険性は、俺はよく分かっているつもりだから」

それだけ言って、木場は走り出した。

全力で走っているのだが、割と紅魔館の奥にいたせいで、門にいくまで少し時間がかかりそうだった。

「くそっ…!」

こういう時に広いと不便だと木場は感じた、本来ならこんな事を想定できるはずもないのだが。猶予は無い、木場が言うあいつ等、オルフェノクは待つてはくれないからだ。

木場はレミリアが貸してくれた自分の部屋を通る時に、ふと、ある事を思い出し、自分の部屋の前で止まった。

「そつだ…」

自分の部屋のドアを壊れるぐらいの勢いで開け、未だ自分の部屋にあった金色のベルトと携帯を手にし、再び門に向かって駆け出した。このベルトがもしも、あの3本のベルトと同じ事が出来るのなら…と考えて。

「くう…」

異形から距離をとり、体から血を流しながらもかろうじて立っているのは、紅魔館の門番。紅美鈴。

敵は灰色の異形。大きな体をしていて、頭には角が二本あり、手には握り拳の形をした鉄球を装備している。

この異形、オルフェノクに最初は弾幕で戦っていたのだが、全く効かず、美鈴得意の武術で対抗した。強い妖怪でも美鈴の武術に敵うものは少ない。が、このオルフェノクは、それすらも効かず、むしろ美鈴が追いつめられてしまうほどだった。

おまけに何人かのメイド妖精が灰にされ、辺りには灰が飛び散っていた。美鈴と他のメイド妖精はその能力を見て、迂闊に近づいたら

殺されると分かった。だから距離をとっているのだが、このままでは防戦一方どころか、一方的に殺されるだけだろう。それを美鈴は分かっていた。

(どうすればいい…、この窮地を脱するには…)

普段居眠りまでするような門番には見えない真面目な顔。彼女がそんな顔になる事は普段は無い。それだけ今の状況が深刻なのだ。美鈴が考えてるうちにも、オルフェノクは鉄球を振り回しながら近づいてくる。動こうとする美鈴だが、体を動かせば体に痛みが走る。それぐらい体が傷ついているのだ。

「はぁ…もう少し強いものだと思っていたんだがなぁ…」

突然オルフェノクが喋り出した。

「喋った…!？」

先程までオルフェノクは、一言も発さず、美鈴とメイド妖精を相手に戦ってきた。それに、妖怪でも此処までの奴はいないだろうという化物が喋る事は、美鈴にとっては驚きだった。

「紅魔館の門番。紅美鈴。それなりに強いと聞いていたが…とんだ期待外れだ。他の奴等も退屈だろうなぁ、それなりに強いと言われているこいつがこんなに弱いんじゃない、他の妖怪も弱いんだろうしな」

美鈴が気にかかったのは「他の奴等」という言葉だった。まるで、自分以外の仲間がいるような台詞だ。

「他の奴等…?」

「あ？ああ、俺以外にもいるんだよ。『オルフェノク』は」
「オルフェノク…？」

オルフェノク。聞き覚えのない言葉だった。木場はレミリアと咲夜には説明をしたが、他の皆には説明していない。美鈴にとって、オルフェノクという言葉聞いたのはこれが初めてだった。

「ま、今から死ぬあんたに説明する必要も無いな」

オルフェノク、正確に言えばオックスオルフェノクは一步步近づいてくる。

対抗手段の無い美鈴も死ぬ事を覚悟した、その時だった。

「待てっ！！」

美鈴の後方、紅魔館の扉の方から大きな声が聞こえた。
振り向くと、そこには

「勇治さん…？」

紅魔館の扉の前で金色のベルトを腰に巻いて、立っていた。

「オルフェノク！なんでお前達が幻想郷にいる！」

「ほう？この世界の奴がオルフェノクを知っているのか。それとも、外人か？」

木場は美鈴に駆け寄る。美鈴の心には安心…は生まれなかった。むしろ、余計に不安になったほどだ。その理由は、木場までもオルフェノクに殺されてしまうのではないか、と思ったからだ。

「どっ…して…」

「話は後、下がっていて」

木場はオックスオルフェノクの前に立ちはだかり、睨みつける。その顔は怒りで満ちていた。多くのメイド妖精を、そして美鈴を傷つけた事に対して、怒りを感じているのだ。まだ数週間の付き合いとはいえ、木場にとっては仲間同然の美鈴達を傷つけたこのオルフェノクは許せないのだ。

「…何で此処を襲った」

静かに、しかし怒りを込めた声で木場が聞く。オックスオルフェノクはこう答えた。

「オルフェノクというのはこういうものだろう？人間を襲い、殺す。そういうものだ俺は思っていたんだがな？ああ、この世界では妖怪や妖精もか」

悪びれる様子もなく言うオックスオルフェノク。その言葉には本当に悪い事はしていない、これが当然という感情が込められていた。その言葉に、木場は激怒した。

「ふざけるな！！」

左手に持った携帯、オーガフォンを開き、キーを押していく。押したキーは0を3回。

「勇治さん…」

今の自分には何もできない、そう分かっているながらも、不安な美鈴。

その声を聞き取ったのか、木場は後ろを見て

「大丈夫。心配しないで」

笑顔でそう言った。再びオックスオルフェノクの方を向き、オーガフォンのENTERキーを押す。

Standing by

オーガフォンを閉じ、オーガフォンを持った左手を上に掲げる。

「変身！」

腰のベルト、オーガドライバーにオーガフォンを装填した。

Complete

オーガドライバーから金色の光、フォトンストリームが伸び、木場の体に駆け巡った。

そして光に包まれる。その眩しさにオックスオルフェノクも美鈴も腕で目を覆った。

光が消え、オックスオルフェノクと美鈴が見たもの。それは、木場勇治の姿では無かった。

黒と金が目につく姿。全身をファイズ、カイザ、デルタのソルメタルと言う装甲を超えるルナメタルと言う装甲とローブを纏い、をイメージさせる眼の色は赤。

美鈴もオックスオルフェノクも、そして木場すらも知りえないこの姿。

威風堂々とした、まるで王を思わせる姿。その名をオーガ。

幻想の地に、大地の帝王がその姿を現した瞬間だった。

大地の帝王（後書き）

第2話、どうでしたでしょうか？

紅魔館案内からオーガへの変身まで。

見れれば分かりますが、現在の木場さんはオーガの名前など、オーガに関しての詳しい事は何も知りません。

このような小説ですが、見ていただけたら幸いです。

見てくださった方には絶大な感謝を。

それでは。

決意（前書き）

どうも、紫色でもマゼンタ色でもないモヤシです。

第3話です。第2話から間が空いてしまってますみませんでした。

今回は戦闘描写がありますが、上手く書けているか不安です。

それでは第3話、始まります。

8月6日・追記 感想で指摘された部分を修正しました。

決意

「……………」

オーガが自分の両手を見つめる。ファイズ、カイザ、デルタと同じ事が出来るのではないかと思い、予想通り変身できたこの姿。今の自分の姿は何と言う姿なのか、それすらも分からない。だが、そんな事は今はどうでもよかった。何故ならこれで

(これで…皆を守る…)

オーガはオックスオルフェノクを睨むように見て、両手を握り、構えた。

オックスオルフェノクもそれを見て先程までの余裕から一転、若干の焦りがあった。

「き、貴様！何だその姿は！」

その言葉にオーガは静かに答える。

「…俺も分からない。でも、これでお前を倒せるのは分かる」
「変わったぐらいで…調子に乗るなア！！」

挑発するような台詞を吐いたオーガに激情したオックスオルフェノクは鉄球を振り回して狂ったような叫びを上げて、オーガに突進してくる。

「ウオオオオオオオ！！！！」

振り回している鉄球を難なく避けるオーガ。幾度も戦いを潜り抜けている木場にとつて、ただ振り回されている鉄球を避ける事など何て事は無かった。

「はっ！」

オックスオルフェノクの攻撃が空振り、隙が出来たオックスオルフェノクの腹部に思い切り拳を叩き込んだ。思い切り攻撃したにしても、大きく仰け反る程度のものだらう、ならそこから畳みかければいい。木場はそう思っていた。が、予想外の事が起きた。

「グアアアアア！！！」

オックスオルフェノクは、ファイズやカイザ、デルタのパンチでは考えられないような程の威力で、紅魔館の門の外まで吹き飛んだ。その威力に驚愕する木場。

（何だ…この威力は…）

木場はオーガの予想外の力に戸惑う。どう考えてもこのベルトは、3本のベルトの力を大幅に上回っていた。

「グッ…！！！」

オーガの力に戸惑っていた木場は、立ちあがってくるオックスオルフェノクに気付き、自分からオックスオルフェノクの方に近づいていく。

自分の力に戸惑っている暇は無い。今はただ、皆を守る。そう思いながら。

「ウガアアアア!!!」

オーガは腰にあるオーガストランザーを手に持ち、オックスオルフェノクに向ける。実は木場、このベルトについて調べた事がある。その時変身はしなかったが、この武器の形状や、銃口がある事から、攻撃方法は何となく分かっていたのだ。オーガは向かってくるオックスオルフェノクに向かってオーガストランザーからの銃撃を放つ。

「グガア!!!」

オックスオルフェノクが怯んでいる隙に、オーガはベルトのオーガフォンからミッションメモリーを抜き、オーガストランザーに装填した。

Ready

オーガストランザーの刀身が伸び、短剣のような状態から長剣になる。ファイズとカイザになった事がある木場は、オーガストランザーにあったオーガフォンについているミッションメモリーを挿入できるような部分を見て、ファイズやカイザと同じような事が出来ると考えたのだ。

「はあああああ!!!」

オーガはオックスオルフェノクに向かって一直線に走り、オックスオルフェノクの目の前まで来ると、オーガストランザーで何度も斬りつける。

「グッ!アグッ!!!ウガア!!!」

攻撃を受ける度にオックスオルフェノクは苦しみの声を上げる。そのままの勢いで、オーガはオックスオルフェノクに攻撃を加えていく。

「…これは、どんな状況なのかしら？」

そう呟くのは紅魔館の主、レミリア・スカーレットだ。敵襲、そして木場の焦り方からただ事で無いと察した咲夜によってレミリアは朝にも関わらず起こされ、外に連れ出された。吸血鬼というのは日光を長時間浴びると蒸発する。その為、咲夜に日傘を差してもらっている状態だ。

そしてレミリアと咲夜が紅魔館の扉を開け見たもの、それは、傷つき、今にも倒れそうな門番と、辺りに落ちている灰。そして灰色の化物と黒と金が目につく謎の戦士が戦っている所だった。

灰色の化物の方は、以前木場が説明していた「オルフェノク」なのかもしれない。

「お、お嬢様…」

傷だらけの体を引きずりながらも、レミリアの元に近づくと美鈴。辛うじて立っている状態でありながらも、美鈴は状況の説明に入った。

「灰色の化物による、敵襲が…私では…力が及ばず…この様ですよ…」

苦笑いしながら言う美鈴だが、その顔は辛そうだった。痛みによるものか、それとも、自分ではオルフェノクを倒せなかった悔しさからなのか。それは分からない。美鈴は説明を続ける。

「それで…勇治さんが割って入って…あの…姿に…」

門の外を指差して美鈴が言う。レミリアと咲夜もそちらの方に目を向けると、謎の戦士が灰色の化物と戦っている姿だった。よく見ると、その戦士が巻いているベルトには見覚えがある。倒れていた木場と一緒にあったベルトだ。

「まさか…木場さん？」

咲夜が驚愕混じりの声で言う。オーガはオーガストランザーによる攻撃で、灰色の化物を圧倒しているようだった。

「……………」

レミリアも咲夜も、そして美鈴も、オーガが戦うその姿を、黙って見ていた。

オーガはオーガストランザーをオックスオルフェノクの右肩に向かって思い切り振りおろす。それをまともに受けたオックスオルフェノクの右肩には激痛が走った。オーガはオックスオルフェノクの右肩にオーガストランザーを押しつけたままの状態でベルトのオーガフォンを開き、ENTERキーを押した。

E x c e e d C h a r g e

オーガのベルトからオーガストランザーを持つ右手までのフォトンストリームを金色の光、フォトンブラッドが通る。フォトンブラッドはオーガストランザーに流れ込み、オーガストランザーの刀身から光の刃が伸びる。その状態でオーガはオーガストランザーをオックスオルフェノクに押し込む。

「ツアアアアアツ!!!」

その結果、オックスオルフェノクの体は、光の刃によって右肩から真つ二つに引き裂かれた。

「オーガストラッシュ」それがこの技の名前だ。

「グガアアアア!!!」

悲鳴を上げるオックスオルフェノクの体に金色の の文字が浮かび上がる。その直後、青い炎に包まれ、同時に青い爆発が起こり、灰となり、崩れ落ちた。

「……………」

その場に残ったのは、オックスオルフェノクだった灰と、オーガだけだった。

オーガは変身を解除し、木場勇治の姿に戻って、オックスオルフェノクだった灰を見つめた。

「美鈴ちゃん！」

木場が美鈴に駆け寄る。傷だらけの美鈴が心配なのだ。

「え、あ、はい…大丈夫…痛ッ！」

いくら妖怪でも、そう簡単に傷口が塞がるわけでもない。オックス
オルフェノクから相当な傷を受けた美鈴には動くならまだしも、立
っついても、痛みが走っていた。

「大丈夫じゃないね、早く手当てをしないと…」

「ねえ」

レミリアが突然声をかけてきた。その目はオーガの事を追求するよ
うな楽しそうな目、ではなく、険しい顔をしていた。自分の館の門
番が傷だらけにされたのだ。気分がいい筈がない。むしろ最悪だ。
レミリアはその化物、オルフェノクの事を聞こうとしたのだが。

「あの化物は…貴方が以前に言っていたオルフェノク？でも貴方の
あの姿はなに？」

「…話は後ですよ。今は、美鈴ちゃんを」

と言って、美鈴の手当てをする為に、木場は美鈴を紅魔館の中に運
び込んで行った。

「これで一安心かな」

紅魔館の中にある内の一部屋に美鈴を運び込み、咲夜が手当てをした。美鈴は「休んでいた方がいい」と木場に言われ、戦いの疲れもあつたせいか、すぐに眠りについた。

「さて、説明してもらおうわよ、勇治」

「うん…って言っても、説明は、以前した通りだよ。あの化物が、オルフェノク」

レミリアと咲夜に以前した説明。それで全てだ。ただ、自分がオルフェノクである事は未だに隠しているのだが。

「すみません」

咲夜がふと言う。木場が咲夜の方を「ん？」といった表情で見る。以前自分が話した事で、自分がオルフェノクであるという事以外は全て話した筈なのだが。

「なら、以前の木場さんの話には出てこなかった…木場さんのあの姿は、何だったのですか？」

その事については、木場も腕を組んで考える。ファイズでもカイザでもデルタでも姿。そしてその3本のベルトを明らかに上回っているパワー。だがシステムは殆ど同じの、木場にも全くの謎のベルト。変身こそ出来たが、結局これが何なのか木場には分かっていない。

「…俺にも分からない。このベルトは俺が知ってる3本のベルトのどれでもないから」

木場は手に持ったオーガドライバーを見ながら言った。
このベルトについてはいくら考えても分からない。木場も知らない事を考えても、分からないという結論が出るだけという事を分かっていた。

「これは…また今度考えよう。俺もいくら考えても結論は出ないし」
「…そうね」

木場に分からない事が、オルフェノクについての知識もベルトについての知識も無いレミリアや咲夜が分かる筈も無い。ようするに考えるだけ時間の無駄なのである。レミリアにも咲夜にもそれは分かる。この日は美鈴は休養し、木場と咲夜は交代で美鈴の看病をする事となった。咲夜に起こされた事と今回の騒ぎでレミリアも完全に起きて、そのまま朝食を取る事になった。

美鈴が寝ている寝室。看病を咲夜と交代し、木場は美鈴の寝ているベッドの横にある椅子に座る。木場はある事を考える。

「…でも、何でオルフェノクが…」

自分の部屋に置いてあるベルトの事も気になるが、結局の所、何故オルフェノクが幻想郷にいるのかも分からない。美鈴を見ると、気持ち良さそうによく眠っていた。傷口は浅くはないからすぐに門番復帰、という訳にもいかないだろうが、この分ならすぐに回復するだろう。

木場はオルフェノクが何故幻想郷にいるのか、そしてベルトの事、その全ての考えを振り払う。もしもこのままオルフェノクが現れ続けるなら、幻想郷の人や妖怪が危険に晒されるだろう。現れないのが一番いい、が、現れないとも限らない。そう思った木場は、決意した。

俺が守る。この世界の人や妖怪達を

仲間を守れない悔しさは木場もよく分かっていた。なら、二度とそんな悔しい思いはしたくない。誰かを失う悲しみを誰かに味あわせてくもない。木場勇治は、再び戦う事を決意するのであった。

「…俺が戦う。もう、誰かが死んでいくのは見たくない」

はっきりと、そして力強く、木場勇治はそう言った。

決意（後書き）

どうでしたでしょうか、第3話。

とりあえず戦闘の決着と説明、そして木場さんの戦う決意です。

次回には敵陣営の事も少し書く予定です。

ところで話は変わりますが、555キャラでデルタこと三原が巧や木場を呼ぶとき何と言っていたかが思い出せません。

もしかしたら呼んでいないのかもしれませんが、どうなのでしょう。もしも劇中で呼んでいないなら、皆様は三原は巧と木場の事を何と呼ぶと思っているのか、気になっております。

…というか、三原って巧や木場と長い話とかした事ありましたっけ
… 共闘は何度かしてましたけど…。知っている方、もしくは想像ですがこう呼ぶのでは？という方がいたら、教えてください。あまり関係の無い事なのですが、気になりすぎて夜も眠れません。

前書きでも書きましたが、第2話と第3話でかなり間が空いてしまつてすみません。

では、第4話でまたお会いしましょう。

紅の妹。敵の暗躍（前書き）

「変身！」

（木場がオーガに変身すると、周りが暗くなる。すると、オーガのフォトンストリームが黄金に輝き、目は赤く輝いた）

東方地帝馬

i n a f l a s h

紅の妹。敵の暗躍

「広い…広すぎる…」

オックスオルフェノクを倒した次の日。

愚痴をこぼしているのは木場。愚痴なんてあまり言わない木場だが、紅魔館の広さにはさすがに愚痴もこぼしたくなる。執事という役職ではあるが、実際はメイド達とあまり変わらない事をしている。木場は現在仕事中だ。掃除にしろ何にしろ、紅魔館内を回る必要がある。しかし問題はその広さだった。

「咲夜ちゃんは凄いなあ…」

これを殆ど一人でやっていたのかと考えると、木場は本気で咲夜を尊敬しそうになる。完璧な女性とはああいう人の事を言うのではないだろうかと木場は思った。

「…ん？」

木場はふと止まる。紅魔館の通路を見慣れない女の子が歩いていたら姿なので顔は分からないが、背の高さからして年齢は10にも満たないであろう少女。髪の色は金色で、その髪をサイドポニーにしており、赤と白の洋服を身に纏っている。さらに背中からは羽が生えており、羽には七色の結晶がぶら下がっている。紅魔館にいる以上、紅魔館に住んでいる妖怪だとは思っただが、木場はそんな少女を見た事が無かった。

「…君は誰？」

少女に声をかけてみる。その声に気付いた少女は、木場の方に振りかえり、きよとんとした顔で首を傾げる。

「だあれ？」

「俺は木場勇治。君は？」

少女に名前を名乗る木場。すると、目の前の少女も名前を名乗った。

「私はフランドール・スカーレット。ねえねえ、勇治は何で紅魔館にいるの？」

スカーレット。その言葉に木場はレミリアを思い出す。レミリアも確か「スカーレット」だった筈だ。だがまず、それよりも先に、フランドールに質問された事に答える木場。

「色々あって、今は紅魔館で執事をやってるんだ」

「じゃあ、お姉様の従者？」

お姉様。そして同じスカーレット。その2つの言葉で木場は「この子はレミリアの妹なのではないか？」と思った。木場はそれをフランドールに尋ねる。

「もしかして、君はお嬢様の妹？」

「そうよ」

予想通り、フランドールはレミリアの妹であった。だがレミリアに妹がいるとは聞いた事が無い。というか、2週間以上紅魔館にいたのに、会ったのも、今日が初めてだった。

「2週間は此処にいるのに知らなかったよ。お嬢様に妹がいるなん

て」
「そりゃあそうよね。私は普段地下に住んでるし、昔はずっと地下暮らしをしてたし。あんまりお外に出ないし。ねえ、ところどころ、色々あつたって言うってたけど、色々って何があつたの？」

目を輝かせながら聞いてくる。どうやら好奇心旺盛のようだ。木場はそれに答えようと今までの事を思い出す。

オルフェノクの王との最終決戦。死んだと思つた自分がいつの間にか幻想入り。そして謎のベルトを使つての変身。とりあえず此処に来るまでの経緯を話した。

「じゃあさ、勇治って強いの？」

「それは…どうだろう？」

謎のベルトを使って変身した時の力は凄まじいものがあつたが、あれはベルトの力でしかない。オルフェノクの力もあるが、あの姿が強いのかどうかまでは考えた事が無い。

「でも勇治、戦えるんだよね？」

「まあ…うん」

「じゃあさ、遊ぼー！」

「え？」

強いのか、戦えるのか、そう聞かれて次に来た言葉が何故か遊びの誘い。話の流れがよく分からなかったが、とりあえずその話に乗る事にした。

「うん、いいけど。何するの？」

「うーん…」

フランドールが考え込みながら、徐々に木場から離れていく。そしてある程度離れた後に、木場の方を振り返って、満面の笑みを浮かべた。

「弾幕ごっこ！」

そう言った瞬間、フランドールが弾幕を発射し、木場は驚きつつも、後ろを向いて一目散に逃げたのであった。

「あはは、待てー！」

逃げる木場をフランドールは笑顔で楽しそうに、追いかけるのであった。

「…どうされたんですか？」

まるで何かから追われて逃げるように走って来た木場を見て、心配そうに咲夜が話しかける。木場は若干、肩で息をしているようだった。

「あ、はは…フランドールちゃんに追われててね…」

「妹様に？それでは、お会いされたんですか？」

「まあ、廊下で偶然だけだね」

苦笑いしながら言う木場。話していると後ろからフランドールの声が聞こえてきた。

「ねえー。逃げてばっかじゃつままないよー！」

「そんな事言われても…俺、弾幕は使えないし…」

と、言う木場であったが、フランドールは疑いの眼差しを向けて、こう言った。

「戦えるんでしょー？だったら弾幕は使える筈じゃん」

「戦えるけど、弾幕ごっこは違うからさ…」

フランドールの言う戦いとは弾幕ごっここの事である。弾幕ごっことはあくまでも「ごっこ」なので、命の取り合いではない。しかし木場の戦う力は化物と命の取り合いをするような力だ。

「じゃあさ…そーだなー…私の弾幕をその「力」っていうので打ち破って見せてよ！」

フランドールが提案してきた。確かにそれならば、弾幕を打ち破ればいいだけの話なので、フランドール本人を傷つける事は無い。木場の言っている「力」がどんなものかを知っている咲夜がちらっと木場の方を見て、言う。

「取ってきましようか？ベルト」

「…うん、じゃあ、頼むよ」

咲夜は自身の「時間を操る程度の能力」で時間を停止させて、木場の部屋まで行き、オーガドライバーとオーガフォンを取って、戻ってきた。そして時間停止を解除する。

「持ってきました」

「ありがとう、咲夜ちゃん」

木場は咲夜からオーガドライバーとオーガフォンを受け取り、オーガドライバーを腰に巻く。そしてオーガフォンを開き、000と、コードを入力。最後に、ENTERキーを押した。

Standing by

「変身！」

Complete

木場の体が光に包まれる。光が消えた後には、木場ではなく、1人の戦士、オーガが立っていた。

「下がっていて」

咲夜にそう言うと、咲夜は頷いて、オーガとフランドールが戦うであろう空間から距離を取った。一方、オーガの姿を見たフランドールは、心底面白そうに笑った。

「あははっ！面白いね！じゃあ行つくよー！！」

と、言った直後、オーガの目の前に色とりどりの弾幕が大量に放たれる。しかしオーガは一步も動こうとしない。弾幕は全て、確実にオーガに命中した。砂埃が上がる。オーガの姿は砂埃によって隠れた。砂埃が晴れると、そこには、倒れているオーガではなく、倒れるどころか、1歩も後ろに下がっていないオーガの姿があった。

「うっそー……」

フランドールもまさか弾幕を全て受けきられるとは思っていなかったのだろう。

木場自身も、実は少し驚いていた。あれだけ多くの弾幕をまともに受けて、微動だにしないこの力に。

「本当に面白いね！ならこれはどうかしら！？」

フランドールがスピードがついた槍なのか杖なのかよく分からないものを掲げる。その槍か杖か分からないものに炎が纏わりつく。その炎は次第に剣のような形を作り、最終的にはフランドールの身長を大幅に超える炎の剣と化していた。

オーガは思った。さすがにそれはまずい、と。理由は2つ。

理由1・まともに喰らえばオーガの体でもただでは済まないかもしれない。

理由2・避ければ紅魔館の壁に当たり、確実に瓦礫の山ができる。そしてそれを片づけるのは、木場と、今回の事と関係の無い咲夜の仕事になるだろう。オーガは先程、フランドールが発動したスペルに巻き込まれるんじゃないかと、後ろの咲夜をちらりと見たのだが、その時の咲夜のオーガを見る視線がとても痛かった。まるで「瓦礫撤去なんてしたくはないのですから、何とかしてくださいね」とでも言いたげな視線だ。

「やるしかないのか…」

弾幕を防ぐだけじゃなかったのか、どうしてこうなったんだ。と、心の中で嘆きながら、オーガストランザーにミッションメモリーをセットする。

Ready

オーガストランザーの刀身が伸びて、長剣になり、それを構える。フランドールも手に持った炎の魔剣を振りおろそうと構える。

「いっくよー！禁忌『レーヴァテイン』！」

スペルカードの名を宣言し、炎の魔剣を振りおろした。その剣を喰らうわけにも、避けるわけにも行かないオーガは、オーガストランザーで受け止めた。

「くっ…！」

小柄な少女から発揮されているとは思えない程の力だ。しかしオーガは、オーガストランザーにフォトンブラッドをチャージしたわけでもないのに、炎の魔剣を受け止める事に成功していた。

「なら…もつと力を込めるよ！」

フランドールはさらに炎の魔剣に力を込める。凄まじい力がかかり、オーガも少し辛くなってくるが、オーガの力もまた凄まじく、力負けする事は無かった。

「うっ…これじゃあ決着つかないじゃない！」

フランドールの炎の魔剣をオーガストランザーで受け止め、いつまでもその状態のまま、膠着状態に陥っていた。だが正直なところ、オーガにとってこの状態から逆転するのは簡単だった。何故ならオーガフォンのENTERキーさえ押せば、フォトンブラッドがチャ

ージされ、炎の魔剣を上回る力で押し返せるだろうからだ。しかしそれは出来なかった。この力でフランドールは傷つけられない。そんな事したら、最悪フランドールが死んでしまいかもしれないような事を、木場には出来なかった。膠着状態が延々と続く。しかしそれは、思わぬ人物によって解かれるのだった。

「はい、そこまで」

その声に、フランドールは思わず、自分の手の炎の魔剣を消してしまふ。炎の魔剣が消えた事により、オーガも変身を解く。

「お姉様、何で止めるのよ」

「あのままやってても、ずっとあのままだったでしょ？それに、これ以上やったら紅魔館が壊れるわ」

やれやれ、と言いたそうな顔でフランドールの姉、レミリアがそう言った。

咲夜が木場に寄ってきた。

「お疲れさまでした」

「はは、ありがとう…」

炎の魔剣を受け止めたせいか、腕が痺れる。一応紅魔館の中を見渡してみるが、壊れている所は何処にも無いようだ。そのせいか、先程までの痛い視線は何処へやら。咲夜も笑顔でいる。

「勇治！」

フランドールが木場の所にトコトコと歩いてきた。木場はフランドールの目線に合わせ、自分の体を屈めた。

「何だい？」

「また遊ぼうね！」

遊ぶのは構わないのだが、弾幕ごっこで遊ぶと考えると、変身するか、逃げ惑う事になる。それは正直勘弁して欲しい木場は

「それはいいけど、弾幕ごっことか、戦うみたいなのは無しでね？」
と言った。しかしフランドールは「うー」と、不服そうな顔をする。

「ほら、弾幕ごっこをすると、紅魔館の皆にも迷惑がかかるでしょう？だから、ね？」

木場が何とか説得を試みる。どこか納得できない様子のフランドールだったが、渋々了承したようだった。

「…分かったよ。でも、必ずまた遊ぼうね！」

「うん、勿論」

ニコツと笑いながら、フランドールの頭を撫でる。それが嬉しかったのか、フランドールもとても晴れやかな笑顔をした。

「じゃあね、勇治！」

フランドールはその無邪気な笑顔のまま、紅魔館の地下へと帰っていった。

ちなみにレミリアがタイミングよくフランドールと木場の所に来たのは、フランドールの弾幕による音を聞きつけたからだそうだ。そのレミリアも

「妹が騒がせて悪かったわ。それじゃあまた後でね、勇治、咲夜」とだけ言って、自分の部屋へと戻って行った。

「さて、勇治さん」
「ん？」

木場が何とか無事に終われたなあ…と、思っていた時、咲夜が話しかけてきた。

「仕事はまだまだ残っていますよ？」

笑顔でそう言われた。木場は一瞬硬直した。何とかフランドールとの「遊び」を被害ゼロで終わらせ、疲れているというのに、まだまだ仕事はあるというのだ。そういえばフランドールと出会ったのは仕事の途中だったと、木場は今更思い出した。執事として、そして居候の身としてやらないわけにもいかない木場は

「分かってるよ、咲夜ちゃん」

と、答えた。その声は疲れたような、やれやれとも言いたげな声だった。

オックスオルフェノクがオーガに倒されて2日経った。
此処は幻想郷の何処か。此処に来た者にしか場所が分からないよう
な場所。

そこに2人の男が佇んでいた。1人は年齢は30代〜40代ぐらい
だろうか、スーツに身を包んだ姿をしている。

「あれから2日、どうやら倒されたようですね…」

男はそう呟きながら椅子に腰かけながら考える。

「ファイズかデルタでも来たんじゃないんですか？俺はそう思いま
すけど」

男に話しかけたのはもう1人の男、こちらの姿は白い学生服のよう
なスーツを纏っていて、学生と言われればそう見える青年だった。

「ふむ… かもしれません。ですが、あの時彼女が気になる発言をし
ていましたからね…」

「気になる発言？」

「確か… オーガのベルトは既に相応しい人物に渡した… でしたかね
…」

「オーガ…？」

学生のような男性は首を傾げる。外の世界にいた頃にファイズ、カ
イザ、デルタなら聞いた事はあるが、オーガというベルトは初めて
聞いたからだ。

「まあ、いいでしょう。倒せばいいだけの話ですからね」

椅子に座っている男はその場から立ち上がり、学生のような男性の方を見ながら言った。

「貴方のお陰で、戦力もそれなりに揃いましたしね。これから本格的に活動を始めるとしましょうか……」

男は不敵に笑う。それは、邪悪なものが込められた笑みであった。

紅の妹。敵の暗躍（後書き）

第4話。いかがでしたでしょうか。今回は555のジャンクションを再現しようと思いました。映像が無いと本当に分かりづらいですね。

間が空いた上に、こんなに短くて申し訳ありません。

今回はフランドールとの出会いと、敵の暗躍です。この時点で敵がどんな奴等かを想像できる人はいるでしょうか？

木場は今回の話で、とりあえず紅魔館メンバーの全員と会った事になります。

今までフランドールと会わなかったのは、普段は地下に居ますし、紅魔館内をうろろしてても、あの広い紅魔館で入れ違いになったりして、2週間近く出会えずにいた、という事になっています。

それから、これは念の為ですが、小説内では「オーガ」と「オーガドライバー」の名を使っていますが、木場はまだその名前を知らず「謎のベルトと謎のスーツ」としか認識していません。

次回からはオルフェノクが出現していくことになると思います。

では、第5話でまたお会いしましょう。

迷い（前書き）

大変遅れて申し訳ありませんでした。リアルの方が忙しく、なかなか更新できずにいました。

それでは第5話、始まります。

迷い

「人里に？」

「ええ、これを見て」

フランドールと木場が出会って数日経ったある日。今は本来なら眠っている筈の夜中。にも拘わらず何故紅魔館から明かりが消えないかと言うと、紅魔館の主が夜行性だからだ。その主であるレミリアが突如として「明日人里に行け」という命令を出してきた。木場が疑問の声を上げ、レミリアが一枚の紙を木場に見せる。

「文々。新聞…？」

「ええ、それに、気になる事が書いてあったの」

レミリアに渡された新聞を木場はよく見る。そこには、紅魔館でオルフェノクと戦った自分の、オーガの写真があった。

「これって…」

「ええ、あの戦い、撮られてたみたいね。でもそこが問題じゃないの。文章をよく見てみなさい」

木場は新聞の内容に目を通す。「謎の戦士」だとか「灰色の化物」だとか色々な事が書かれていたが、気になったのはある一文だった。

「この灰色の化物に酷似しているものが人間達の間でも確認されていて噂になっている…？」

「そう。人間の連中にもオルフェノクを見た奴がいるらしいわ。それから、もっと読み進めてみなさい」

木場がその先の文にも目を通していく。そして見つけた文は、信じたくもない、見たくもないような文であった。

「妖怪、人間共に、行方不明者が出ており、その人が最後にいた場所には灰が残されて…」

そこまで言っつて、木場は新聞を畳んで、深刻な顔をした。灰色の化物。行方不明。後には灰。そこから導き出せる答えは新聞に書いてあるような行方不明などでは無かった。

「メイド妖精の死に方と同じ死に方を…したみたいね」

「被害者まで…出てるのか…」

手に持った新聞を握りしめる。オルフェノクによる人間狩りとも言うべきものが始まってしまった。しかも人間、妖怪関係無く。最悪、襲われた誰かがオルフェノクになっているかも知れない。本当の所、文々。新聞が悪ふざけをしているかと思いたかった。だが文々新聞は「多少の脚色はあっても、裏の取れていない事は記事にしない」との事らしい。

「行ってきます。人里に」

「ええ、人里までの道は、分かるわよね？」

人里に向かうまでの道は、以前咲夜に案内された時に覚えた。木場は新聞をレミリアに返し、自分の部屋に戻った。

「……………」

紅魔館で貰った鞆の中にオーガドライバーとオーガフォンを詰める前に、その2つを手を持って見つめていた。オルフェノクが幻想郷

に現れ、人を襲っている事も謎だが、結局このベルトについても分かっていない。それになにより、自分自身が幻想郷に来た事も。

「悩んでも、仕方がないか」

今考えた事は、以前に何度も考えた事がある事だ。今更考えてもしようがない。今はただ、人と妖怪を守るだけ。木場はオーガドライバーとオーガフォンをバッグの中に詰め込んだ。

「じゃあ、行つてきます」

次の日の朝。手にオーガドライバーとオーガフォンを詰め込んだ靴を持った木場が紅魔館の扉の前で振りかえり、ここまで来てくれたレミリア、咲夜、そして未だに傷がある美鈴にそう言った。

「怪我さえ無ければ、ついて行けるんですけどねえ……」

苦笑いしつつ、しかし内心悔しそうに美鈴が言った。

オックスオルフェノク撃破から3日経つが、美鈴の怪我はまだ完治していない。その為門番にも復帰しておらず、木場についていく事も出来ない。

「無理しないで。オルフェノクとの戦いは俺に任せてくれればいいから」

笑顔でそう言った後、木場は紅魔館の扉から外に出た。後ろでは咲

夜と美鈴が頭を下げ、レミリアは「行つてきなさい」とだけ言っていた。現在、美鈴の代わりに妖精メイドが門番をしている。その妖精メイドにも軽く挨拶をして、木場は人里に向かった。

幻想郷の何処か。あの30代〜40代の男性と、学生服のようなスーツを着た男性がいた場所だ。

そこには黒い革ジャケットを着ている柄の悪そうな青年が、スーツに身を包んだ30代〜40代の男性に何かの報告をしていた。

「ほう、それは喜ばしい事ですね」

報告を受けた男性はそう言う。

「はい。こちらで初めての『アタリ』ですからね」

「人間か？それとも妖怪？」

黒い革ジャケットの青年に学生のような男性が訪ねる。黒い革ジャケットの男性は学生のような男性に対して言った。

「人間です。妖怪は何度か試しましたが、まるで駄目。確率は人間よりも低い、それどころか、0%なのかもしれません」

黒い革ジャケットの青年の様子をみると、どうやら学生のような男性の方が上の立場にいるようだった。学生のような男性は少し考えた後に

「アタリなんて人間にもなかなかないんだ。これからも試し続けてみればいい」

と微笑しながら言った。

「さて、今気になるのは、そのアタリの方がどのような行動を見せるかですが…その方の監視は貴方に任せましょう」

「分かりました。では、早速監視に」

黒い革ジャケットの青年は、スーツの男性から与えられた命令に素直に従い、その場から立ち去ろうとする。それをスーツの男性が何かを思い出したように声をかけ、引きとめた。

「ああ、それからもう1つ。その方がもしも、以前私の部下であるオルフェノクを倒した者や、幻想郷の連中に加担するようなら、即、始末してもらって構いません」

「ええ、勿論…」

とだけ答え、黒い革ジャケットの青年はその場から立ち去った。

人里。来るまでかかった時間は30分か40分ぐらいだろうか。飛んで行ければ速いのだが、紅魔館から人里までの徒歩は結構な距離だ。しかも紅魔館の周りは湖で、陸続きの道は1本しか無いという場所なのだ。車かバイクが欲しい、もしくは飛びたいと半ば本気で思いながら此処まで来た。当然ながら人里には多くの人がある。買った物をしてしている人、特に当てもなく歩いて散歩をしている人

など。

「おっ、確かあんた、紅魔館の…」

人里にいる40代ぐらいの男性の1人が木場に気付いて話しかけてきた。以前咲夜に人里に連れて行ってもらった事があるが、その際に知り合った人の1人だ。話しただけで名前は知らないのだが。木場は割と有名だ。紅魔館自体が有名な場所だ。そこに外来人の執事なんてものが突然現れば有名にもなる。木場が最初人里に来て、人里の人達に自己紹介をした時に「紅魔館の執事」と言った時にも、大変驚かれたものだ。

「あ、どうも」

微笑みながら言う木場。以前は紅魔館の執事。あの吸血鬼の執事とはどんな奴だろうと人里の人々に若干警戒されていたが、その人の良さからすぐに認められるようになった。

「どうしたんだい？」

「実は…」

木場は自分が行方不明事件について調べている事をオルフェノクの事は隠し、簡潔に話した。

「ほー、あの行方不明事件の事かい。それなら、1人だけ戻ってきた奴を知ってるよ」

戻って来た人がいるなら話が聞ける、それに今は情報が少ない。何でもいいから情報が欲しいところ。木場にとっては願っても無い事だった。が、木場には期待と同時に不安があった。行方不明者。残

された灰。そこから戻ってきたのは1人だけ。もしもオルフェノクに襲われて戻って来た人がいるなら、本当に逃げて来た人か、それとも…。

「教えてくれませんか、その人」

「いいけど…戻って来たっていうても、行方不明事件とは関係無いだけかもしれないよ。でも、知りたいなら教えてあげるさ」

男性が言っていた人物とは、とある店で働く青年の事らしい。どうやら人里の外に出たから、1週間帰って来なかったそう。だが青年は他の行方不明者とは違い帰って来た。帰って来た後の様子は何かに脅えるようだと言う。今では普通に働いているらしい。

「あいつがそうだよ」

男性が指差した先には、20代前半ぐらいの青年。その青年は客と笑って接していて、見ている分には何も変わった所は無かった。

「明るくて、普通の人みたいですけど…」

木場は青年を見ての率直な感想を述べる。それに男性は首を横に振りながら答えた。

「あいつの父親と俺は仲が良かったもんで、あいつの事もよく知ってるんだけどね。あいつは心から笑ってない。人前ではああだけど、人がいない所だと暗い顔してるってあいつの父親が言ってるんだ。」

いつものあいつなら、明るい顔は絶やさない筈なのにさ」

男性は続けて、とても悲しそうな声で言った。

「何があいつを変えちまったのかねえ……」

男性の悲しそうな目が青年に向けられていた。

「……ありがとうございます。とりあえず、彼と話してみます」

木場は男性に一礼した後、青年のいる店の方に歩いて行った。男性は「おう」と言ってから後ろを向いて、歩いて行った。自分の家に帰ったのか、散歩でもするのかは分からない。

「どうも」

木場が青年に最初に言った言葉がそれだった。青年も「どうも」と返してくる。

「突然ごめん。俺は木場勇治。……話を聞きたいんだ。行方不明事件の」

その言葉を聞いた途端に、青年の体はビクツと震え、手が小刻みに震えだす。余程思い出したくない事なのだろう。当たり前だ。木場にはそれが痛いほどわかる。

「辛い事を聞いてる事は俺も分かってる。でも教えて欲しいんだ、何があったのか」

青年はゆっくりと顔を横に振る。その身体は小刻みに震えていた。

「無理……です……俺……は……」

尋常でなく脅えている。恐らくオルフェノクが関わっている行方不明事件。もしもオルフェノクと遭遇したのなら、この反応も仕方が無い。

「……じゃあ、話せる時が来たらでいいから、話して欲しい。それでいいかな？」

青年はゆっくりと頷く。未だに青年の身体の震えはおさまっていない。木場はその場を立ち去って行った。

(あの脅え方……やっぱり……)

歩きながら木場は考えていた。あの尋常でない脅え方。それだけではオルフェノクが関わっている、と断言できるものではない。しかし、何かあった事だけは確かだ、普通の人間には耐えられないような何かが。そしてその考えと同時に、木場の頭の中には最悪の可能性が浮かんでいた。木場は頭を振ってその考えを振り払った。そんな訳がない。絶対に無い。そう自分に言い聞かせた。だが可能性が否定できないのも事実であった。木場の考える最悪の可能性、それは

あの青年が、オルフェノクとして蘇ったという可能性であった。

「はあ…はあ…はあ…」

先程の青年。店主が震えている青年を見て「ちよつと休んでこい」と言ってくれた。青年は今、民家の影に隠れ、誰からも見えないような場所にいる。青年は息を荒げ、身体から汗が噴き出していた。

「なんだよ、どうなつちまっただよ俺の身体は！！」

自分の両手を凝視しながら、そう嘆く青年の顔には、謎の模様が浮かび上がっていた。

「…もう少し何か聞き込んだ方がいいか」

木場は人里を歩きながらそう呟いた。さすがに情報手ぶらで帰るわけにはいかない。少なくとも人間の間でオルフェノクらしきものが確認されているのは確かなのだ。それについての情報ぐらいは、と、考えている、その時だった。

悲鳴が聞こえたのは。

その声の方向に木場は勢いよく振り向く。そこには、灰色の異形が、

オルフェノクが人を手当たり次第に襲っていた。人里の人々は逃げ惑っており、民家の影や物陰に隠れている人もいる。

「オルフェノク…！」

木場は人目のつかない民家と民家の影に隠れる。変身つもりなのだが、隠れるのには理由がある。それは出発前にレミアアにこんな事を言われていたのだ。

『いい、あの変身っていうのは隠れてしなさい。少なくとも人間にバレてはダメ。それだと貴方が多分大変な目に遭う事になるし、執事である貴方だとバレたら紅魔館にまで大変な目に遭う。それは避けたいの。ただでさえ文々。新聞で変身した姿がバラされてるんだから。分かった？』

という訳である。確かに知られたら厄介な事になりそうだと思った木場は、それを了承した。木場は鞆の中からベルトを取り出し、ベルトを腰に巻いた。そしてオーガフォンも取り出し、それを開く。そして0のキーを3回押し、最後にENTERキーを押した。

Standing by

「変身！」

Complete

木場はオーガへ変身し、木場は民家の影から飛び出し、オルフェノクに向かっていく。

「はあっ！」

オーガはオルフェノク、マンティスオルフェノクに殴りかかる。マンティスオルフェノクは突然の攻撃で大きく仰け反る。さらにオーガはその隙にマンティスオルフェノクの腹部に右足で蹴りを放つ。その威力にマンティスオルフェノクは吹き飛んでしまった。

「グガアアアア！！」

吹き飛んだマンティスオルフェノクはすぐさま起き上がり、理性が何処かに吹き飛んだように怒り狂った声を上げる。しかし、その後。

「グッ！」

マンティスオルフェノクはその場で周りを見た後、自分の手を見始める。まるでいきなり我に返って、自分が置かれている状況が分かっていないような印象を受ける。マンティスオルフェノクはその場から逃げだす。

「ッ！？待てッ！！」

オーガはマンティスオルフェノクを追いかける。マンティスオルフェノクは途中の曲がり角で曲がる。オーガも当然それを追って曲がった。しかし、そこにいたのはマンティスオルフェノクでは無かった。

「…え？」

木場も思わず声を漏らしてしまう。そこにいたのは人。それも、先程の青年だった。今此処を曲がっていったのはマンティスオルフェノク。だがいるのは先程の青年。木場の頭の中には、1つの考えが浮かんでいた。それは先程自分が考えた、最悪の可能性。

「貴方は…」

ベルトを引き抜いて変身を解く。その姿を見た青年が涙声になりながら木場に話しかけてきた。

「あ、あなた…：なあ、教えてくれよ。俺はどうなっちまったんだよ！何なんだよ！あの灰色の化物は！何で俺まで…その姿に…」

聞きたくなかった言葉「俺までその姿に」これはつまり、この青年が、オルフェノクになってしまったという事だ。木場は青年の質問に答えられずにいた。

「それは…」

「あなた、何か知ってるんだろう！？教えてくれよ！俺は…俺は…！」

木場は迷った。重々しい現実を突き付けるか。いずれ分かかってしまう嘘を吐くか。だがオルフェノクの姿を自分で見てしまった以上、恐らく嘘をつけばすぐに分かかってしまい意味の無い事。木場は決断し。口を開いた。

「貴方は…」

そこから話し出した、重々しい現実。それは青年の心で受け止めるには、あまりにも重すぎる話だった。青年に起こった事を全て話し終わった木場。青年は何故か笑い出した。

「は、ははは…おいおい、俺を襲った化物と同じになっただって事が…ははは…」

その笑いは、嬉しさや、馬鹿馬鹿しさで笑っているわけではない事は木場にも分かる。何かに絶望したような笑いだ。それに見れば、青年の顔からは生氣と呼べるようなものが消え去っていた。

「どうすりゃ…いいんだよ……」

「…分かります。その気持ち」

「あんたに…何が分かんたよ……こうなっちまったら…俺は…」

木場は一瞬だけ、自分の姿をオルフェノクとしての姿。ホースオルフェノクに変え、人間の姿に戻った。それを見た青年は驚きに目を見開いていた。

「あんた…!」

「俺も…望んでないけど、オルフェノクになりました。だから貴方の気持ちは痛いほど分かります。他にも俺の知り合いに、人間として生きたオルフェノクがいます」

そこから木場は自分が知っている、人と共存をしようとしているオルフェノク達の事を話し始めた。

「…俺、その人達みたいに生きていけるか？」

青年はそう言った。絶望しきった表情で。そして、続けて言葉を紡

ぐ。

「今の話を聞いても、正直、この姿でさっきみたいに狂わずに平然と生きていける自信は無い。こんな力で、暴れださない自信が…それにさつきはあんたが止めてくれたけど、俺は皆を傷つけちゃったから…」

俯きながら青年はそう言った。それは悲しみや、絶望が入り混じった声だった。

人里は慌ただしい空気に包まれていた。文々。新聞に書いてあった灰色の化物が現れた事、そしてそれと戦う謎の戦士。戦士と化物の事は逃げるのに必死で、誰もはっきりとは覚えていないらしい。

「そうか、なら安心だな…」

ほっと胸を撫で下ろし、そう言ったのは1人の女性「上白沢 慧音」水色の髪をしており、この人里の寺子屋で教師をしている。人里の人からの信頼も厚い。

「ええ、でもあれで誰も死んでないって不思議ですよね」

男性がそう言う。実は先程のマンティスオルフェノクの騒動で、誰1人として死んでいないのだ。切り傷こそある者の、誰も致命傷には至らなかった。誰も分かる筈もないが、それはマンティスオルフェノクが暴走してただけだからだ。オルフェノクは自分の意思で

「使徒再生」と言う心臓にオルフェノクの力を送るという特殊な方法で人を殺す。その際、殺された人間は1度蘇る。そしてオルフェノクの力に耐えられたものはオルフェノクに、耐えられなかった者は灰になり、崩れ落ちる。だがマンティスオルフェノクは違う。彼は闇雲に人を襲っていただけであり、人を殺すまでには至っていないのだ。

「うむ、幸いと言えば幸いだが…」

慧音には気になっている事があつた。灰色の化物もそうだが、それと戦った戦士の存在。その時に慧音は確かに灰色の化物と戦士を見た。が、人の避難の為にそこから目を離し、再び見てみたら、いつの間にかいなくなっていたのである。

「本当に、誰も見ていないのか？灰色の化物とそれと戦う戦士を」「ええ、殆どの人がちらりと見ましたけど、よく覚えてないようです。何せ皆逃げるのに必死で…」

男性はそれだけ言うと「じゃあ、俺も自分の家族の事があるので」と、帰って行った。彼には兄がいるが、その兄も軽傷だが怪我をしづらい。慧音も寺子屋に戻ろうとした時、1人の男性が目止まった。何かを考え込んでいるような男性。以前彼が人里に来た時に見た事があつた。そしてその時、外来人にも関わらず一夜にして紅魔館の執事になった男とも聞いている。

「君は確か…」

慧音はその彼、木場勇治に話しかけた。彼は外来人。もしかしたら灰色の化物と謎の戦士は外の世界にいたのかもしれないとも推測してきた。それが慧音の話しかけた理由だ。

「あ、どうも…貴女は？俺は木場勇治です」

「上白沢慧音だ。此処の寺子屋で教師をしている」

お互いの軽い自己紹介を終え、慧音は木場に聞きたい事を尋ね始める。

「すまぬが、君は何か知らないか？灰色の化物と、それと戦った戦士について」

木場はギクリとなった。戦士は自分の事な上、灰色の化物については嫌というほどよく知っているからだ。

「…知っては…います」

木場は若干ぎこちなくそう答えた。

「本当か！？知っている範囲でいい、何か教えてくれないか！」

慧音が声を大きくして言った。しかし慧音は手で慌てて口を塞いだ。

「す、すまん…いきなり大声を出してしまつて…」

「いえ、いいんですよ」

木場は慧音に最低限の事を話した。外の世界にもいた事。灰色の化物の名称。特徴。人を襲う事。

「…そうか。という事は、奴等も忘れられたか、何らかの方法で幻想郷に…？」

木場は人が1度死んでオルフェノクが誕生した事は話さなかった。人里の青年がオルフェノクになった事を考えると、何となく話したくなかった。だが、これだけは話した。

「でも、オルフェノクの中にも、共存を望む者もいるんです。それだけは、分かってくれますか？」

とても必死な顔だった。人を襲った所を目撃した身としては、信じがたいものでもある。だが木場の顔は、これだけは絶対に信じて欲しいという顔をしている。きっと彼は何かを経験しているのだと。オルフェノクに関する何かを。

「分かった。だがもしも人を襲うのなら、私は全力で迎え撃つが…それでもいいか？」

慧音は深く探らず、そう言った。その言葉に木場は頷く。会話が終わり、木場は紅魔館に帰ろうと、その場から去ろうとした。

「待った。あともう1つだ。オルフェノクと戦った戦士に関しては何か知らないか？」

慧音に背を向けている状態の木場は振り返って言った。

「それは…俺も知りません」

「…そうか。すまなかつたな、情報ありがとう」

自分がその戦士である事を話してもよかつたが、レミアアとの誰にも教えるなという約束もあったので言わず、木場は再び進行方向に向き直り、人里の外を目指して、帰っていった。

紅魔館に帰ってきた木場。紅魔館の自分の部屋に向かおうとした木場。その道の最中に咲夜と会った。

「お帰りなさい木場さん。どうでしたか？」

「…人里でオルフェノクと、出くわした」

「倒せたのですか？」

倒す。その言葉を聞いて木場は人里でのある約束を思い出した。それはオルフェノクとして覚醒してしまった青年とのある約束。

『俺が暴れだしたら、倒して欲しい』

木場には倒せる自信は無かった。実力的な問題ではない。オルフェノクとして理性的に人間を襲っているのなら、迷いなく倒せるかもしれない。だが、人として生きようとしている、暴走してしまっただけのオルフェノクを迷いなく倒せる自信は無かった。

「…逃げられた」

咲夜の問いにそう答える木場。マンティスオルフェノクが人里の青年がオルフェノク化してしまった姿なんて、木場には言えなかった。

「そうですか。では、戦闘の後ですし、ゆっくりお休みになってください。仕事はしばらくしてからでいいですから」

「…うん。ありがとう」

木場は自分の部屋に戻り、オーガフォンとオーガドライバーを入れた鞆をベッドの上に置いて、椅子に腰かけた。そして考えた。青年が暴走しない事が一番だ。だが今回の事がある以上、暴走する可能性が無いとは言えない。それどころか、暴走する可能性の方が高いかもしれない。

「どうしたらいい…俺には…」

彼が暴走しても自分には倒せない。木場自身、何度も何度も悩んで結局答えが出せなかった事に、この幻想郷で再び悩み、迷う事になってしまったのだった。

迷い（後書き）

どうでしたでしょうか、第5話。

今回サブタイ通り、木場さんに迷いが生じました。

そしてさりげなく慧音先生と木場さんが初対面です。

こういう話題は555では外せないと思うのです。上手く描けているかはとても不安ですが…。

それでは、第6話でお会いしましょう。

まだ答えは出ないけど(前書き)

大変お待たせしました。リアルが忙しくなかなか更新できませんでした。

その上短いです。もっと頑張らなくてはいけないです。

それでは第6話、始まります。

まだ答えは出ないけど

青年と出会った次の日の昼食。木場は1人暗い顔をしていた。彼が悩んでいる問題は、彼自身も何度かぶち当たり、そして答えを出せずにいた問題だ。オルフェノクと人間。それは木場にとってとても難しい問題であった。オルフェノクとは人間が一度死んで蘇った存在である。そしてその心は人間と変わらない。オルフェノクの力に飲まれて人間を滅ぼそうと考える者もいるが、人の心を持つオルフェノクもいる。そんなオルフェノクがいるからこそ、木場は人間とオルフェノクの共存を目指した。だが結局それは叶わぬままだ。今抱えている問題は、そんな人間の心を持つオルフェノクが暴走した時に倒せるかという事だ。

「……………」

昼食を黙々と食べながら考え込む木場。人間の心を持つオルフェノクを殺すという事は、人間を殺す事も同然だ。いや、木場にとってはどんなオルフェノクを殺したにしても、人間を殺した事と同じなのだ。木場が答えを出せぬまま、昼食も終わった。

「ねえ」

「えっ？はい、何ですか？」

昼食後、パチユリーが木場に声をかけた。

大図書館に引き籠り状態のパチユリーも無飲食なわけではない。さすがに食事時には出てくる。昼食を食べている時、パチユリーはふと、木場の顔が目に残った。普段とは違う、とても暗い顔。まるで何かに悩み、苦しんでいるような。それが気になりパチユリーは木場に声をかけたのだ。

「貴方、何かに悩んでるの？」

「…何故ですか？」

「普段とは違う暗い顔をしていた。後は勘」

表情と勘だけで見抜かれたらしい。洞察力と勘の鋭い人だ、と木場は感じていた。

「まあ、違うなら違うで別にいいのだけれどね」

パチユリーは大図書館に戻ろうと木場に背を向けて歩き出した。だが数歩歩いて足を止めた。

「そうね。もしも本当に悩んでるのなら早く解決する事をお勧めするわ。それに、それが貴方だけの問題ならいいのだけれどね」

木場は紅魔館の掃除をしながら考え込んでいた。自分が悩んでいた問題とパチユリーに言われた言葉だ。

（俺だけの問題ならいいって、どういう事なんだ…？）

パチュリーの言葉も気がかりだし、木場が悩んでいる問題にしても考えても答えは出ない。オルフェノクと人間。その問題は木場のみならず、乾巧もぶつかつた問題だ。オルフェノクとは人間が1度死んで蘇り、怪物の力を得た「人類の進化系」だ。その大半はオルフェノクの力に飲まれて人間を滅ぼそうという考えを持っている。が、人間の心を持ったまま生き続けるオルフェノクも存在している。今回の例のように、いきなりオルフェノクになって、暴走してしまうような者も中にはいるのかもしれない。

オルフェノクと人間は同じだと考える木場にとってはとても深刻な問題である。それを考えていた木場はふと、迷わずオルフェノクを倒していた乾巧の事を思い出した。

「…ダメだなあ、俺」

乾巧もきつとこういう迷いがあっただろう。だが、その迷いを断ち切って彼は戦っていた。どれほど辛い戦いであっても。それに比べて自分は結局結論を出せていない。

結局木場は、これをずっと悩み続けていた。

数日後、木場は再び人里に向かった。勿論、オーガドライバーとオーガフォンは持っていつている。実はあの青年と木場が出会ってから、オルフェノクを見かけた人間が後を絶たないのだ。しかもそのオルフェノクの姿は少しブレてはいるが、文々。新聞の写真にしっかりと撮られていた。そのオルフェノクの姿は、あの青年のオルフェノク態だったのだ。

「あの人、どうしてるかな…」

人里までの道中、オルフェノクになってしまった青年の事を考えていた。木場の中ではそういえばあの人の名前知らないな、なんて暢気な事を考える余裕すら無い。

人里に到着し、木場は一目散に青年のいる店に向かった。そこでは接客をしている店員がいたのだが、青年の姿は無かった。

「あいつなら、2日間帰ってきてないよ」

青年の場所を聞くとそう言われた。2日もの間、何処に行っているのか。あの時の絶望し切った表情を思い出す。あんな状況だと何をしてもおかしくはない。実際、木場自身も自殺を図った事がある。だがオルフェノクになるとそう簡単に死ねない事をそれで知ったのだ。だからあの青年は簡単には死なないと思っただが、とにかく不安だった。

「一体何処に…」

舌打ちの1つでもしたくなかった、そんな時だ。

人里に悲鳴が響いたのは。

「!？」

木場は即座にその方向を振り向く。見れば、灰色の怪物が人を襲っているではないか。そしてその灰色の怪物、オルフェノクに木場は

見覚えがあつた。だが木場はその状況から目を背けたかつた。信じ
たくなかつた。何故なら、暴れているオルフェノクはあの青年のオ
ルフェノク態だからだ。

「ウオオオオオオオオオオ!!!」

獣のような叫びを発し、マンティスオルフェノクは辺りの人間を切
り裂いていく。逃げ切れなかつた人達はマンティスオルフェノクの
鎌の餌食となり、その場に崩れ落ちていく。

「くっ…!」

木場はマンティスオルフェノクの被害者に向かつて走り出した。そ
して木場はある1人の男性の被害者のところで止まつた。その男性
は斬られた腹の部分から滝のような血を出し、素人目でも相当危険
な状態だと分かつた。

「大丈夫ですか!」

木場はその男性に向かつて呼びかけた。意識を失いかけていた男性
は苦悶の表情と共に目を開けて、ゆっくりと指を何処かに向けた。
木場がその指の先を見ると、女性が1人、まだ10歳にもならない
ような女の娘が倒れていた。

「な……あ……」

男性は木場の事を呼びながら、女性と女の娘に向けていた手で木場
の肩を掴んだ。木場は女性と女の娘からその男性の方に視線を戻し
た。

「守って……くれねえ…か？お、れの……妻と……むす…め……を…」

今にも死にそうな人が懇願してくる。自分ではなく、自分の家族を助けてくれと。木場は男性に声をかける。

「でも、貴方は…」

「い、いいん……だ……俺ア……もう、助……か……ら……ねえ……。だから……家族……だけ……は………」

それだけ言っつて、木場の肩を掴んでいた男性の手は糸の切れた人形のように力を失い、だらんと、垂れ下がった。

「……くっ」

男性から離れ、女性と女の娘の方へと駆け寄る。どうやらこちらは軽傷のようで、いきなりの事で気絶しているだけだったようだ。

「良かった…」

ほっとした木場はその場から立ち上がり、マンティスオルフェノクのいる方を見る。だがそこには、地獄のような光景が広がっていた。

「なっ……」

人が大勢倒れている。それこそ、何十人と。中には近くに血だまりを作っている人までいた。そしてそれを行っているのはマンティスオルフェノク。人間の心を失っていない、オルフェノクである。

「……………」

木場はまだ迷っていた、あの人間の心を持つオルフェノクを倒すべきかを。ここで木場は、パチュリーの言葉を思い出す。

貴方だけの問題ならいいのだけれどね

木場は気付いた。それはこういう事だったのだ。恐らく、今、人里を守るのは木場だけだ。そしてその木場は今、迷っている。あの青年を倒すべきか。だがこうして迷っているうちに何が起こった？人が傷つき、死んでいったのだ。守れる力があるのに。

「そうか…パチュリーさんの言った事は、こういう事が…」

木場はオーガドライバーを靴から取り出し、腰に巻いた。そしてオーガフォンを開き、コードを入力していく。

「そうだ…あの時決めたんだ。人も妖怪も守る。俺が戦うって…」

0

「正直、今も俺は分からない。何が正しくて、何が間違っているのか…」

0

「でも、俺が迷っているうちに人が死んでいくのに、それなのに迷っていたら、もっと多くの人死ぬ…」

0

「だから戦う。迷っているうちに人が死ぬなら。俺は…罪だつて背負う」

ENTER

Standing by

「変身！」

木場はオーガドライバーに、オーガフォンを装填した。

オルフェノクというのは良し悪しはあるが、人の心を持っている。それを殺す事は木場にとつては人殺し同前だ。以前木場も、怒りに任せて人を殺した事がある。だが我に返った時には、罪悪感に苛まれた。自分は生きていてはいけなないと。それと同じ事をこれから繰り返そうとしている。木場にとつてそれはどれほど辛いだろうか。だがそれでも木場は

Complete

オーガに変身した。オルフェノクを、倒すために。

まだ答えは出ない。だが今は、人の為に。

まだ答えは出ないけど（後書き）

どうでしたでしょうか、第6話。

正直、こんなに間が空いたのに低クオリティです。まだまだ努力が必要ですね…。

今回の話は木場さんが若干巧のような事を言いました。

ですが巧は「俺はもう迷わない」と完璧に決断していましたが、木場さんの場合、「今も俺には分からない」と、まだ迷いが残っています。

その辺り完璧に決断できないのは木場さんだと思っんです。

では第7話でお会いしましょう。

蠅螂の暴走（前書き）

どうも、モヤシです。

もう1ヶ月振りの更新となります。

こんなに遅れて、本当に申し訳ありませんでした。

それでは第7話、始まります。

蠍の暴走

誰も木場の変身は見ていなかった。意識があっても、傷の痛みでまともに立ち上がる事も出来ないからだ。だが、地面に転がる彼等にも1つだけ見えたものがあつた。それは光。太陽ではない、何か別の、黄金の光。

「ウガアアアアア！」

「うわああああ！！！」

「お父さん！！！」

襲われ、悲鳴を上げる男性。彼の横には娘がいた。彼はせめて娘だけは、と守るように娘を固く抱きしめていた。その2人の親子に、容赦なくマンティスオルフェノクの鎌が振り下ろされる。親子は目を固く閉じる。その瞬間。

「ハアツ！！！」

変身直後、木場はマンティスオルフェノクに向かって駆け出し、殴りかかっていた。オーガのその攻撃力と助走をつけた威力。さらに理性が無い敵、別の人間を襲おうとしていた彼にとつては不意打ち同然だった攻撃は、マンティスオルフェノクを遠くに吹き飛ばす。2人の親子はいつまで経っても来ない鎌を疑問に思い、目を開けた。そこにいたのは灰色の異形では無かった。それは灰色の異形と共に、文々。新聞にも載っていた黄金の戦士。黄金の戦士はこちらを見たかと思うと、声を発した。

「早く、逃げてください！」

「あ…ああ！ありがとうございます！」

彼は突如現れた戦士に困惑しつつも立ち上がり、娘を抱えて安全な場所へ逃げて行った。そんな2人を見送ったオーガは、すぐさまマントイスオルフェノクに向き直る。

「ウウウウウウー!!」

吹き飛ばされたマントイスオルフェノクはよろりと立ち上がった後、雄叫びを上げる。殴られた事に対しての怒り、理性が飛び、自分を攻撃したものを敵とみなす本能。そのみでオーガに襲い掛かってくる。

「ウガアアアアー!!」

羽を広げて飛び、オーガを切り裂こうと上空から鎌を振りおろし襲い掛かるマントイスオルフェノク。着地と同時に、重力落下の力を加えた鎌でオーガに斬りかかる。しかしその鎌は、オーガの右腕により受け止められる。本来ならば右腕が綺麗に斬れてしまうだろうが、オーガの屈強な鎧には火花を散らすのが精々であった。

「ハッ!!」

オーガの出した左拳はマントイスオルフェノクの腹部に正確に当たった。その激痛から、マントイスオルフェノクは腹を押さえて2、3歩後ろに下がる。その隙を見逃さず、オーガは容赦無く右拳、左拳と何回も攻撃を加えていく。

「ウガッ!ウグッ!グガアー!!」

オーガの強烈な力による拳。それは一発だけでも相当なダメージを

与える。そんな攻撃を何発も食らえば、並のオルフェノクなら立ち上がれなくなるだろう。そういう意味ではまだ立っているマンテイスオルフェノクはかなりの耐久力があるのかもしれない。

「クツ……ハアツ！」

一瞬躊躇しながらも、右足を上げてハイキックをマンテイスオルフェノクの鳩尾に当て、相手を吹き飛ばすオーガ。…もしかしたら、マンテイスオルフェノクはオーガの力を受けて倒れない程の耐久力を持っていたのではなく、無意識の内に木場が手加減をしていたのかも知れない。

Ready

オーガはオーガストランザーにミッションメモリーを装填。短剣の状態から長剣にする。そしてオーガフォンを開き、ENTERキーを押そうとした。が、その時である。

「ッ!？」

何処からか飛んできた銚がオーガストランザーに当たり、オーガストランザーがオーガの手から地面に落ちてしまった。銚は前方にいるマンテイスオルフェノクよりも少し右斜めの方向から飛んできた。その方向を見ると、もう1体のオルフェノクが見える。

「…つたく、まだ力を制御できないとは…さつさと人間の心を捨てさせた方が賢明だな」

水中銃を持ったオルフェノクはボソリと呟いた。フライングフィッシュオルフェノク。彼の水中銃から放たれた銚が、オーガストラン

ザーに当たったのだ。

「ウウ……」

「あれだけ食らって意識があるのか……ま、意識があると運び辛いかな……ッ!!」

「ウグッ!？」

意識があるといってもフラフラの状態だったマンティスオルフェノクの鳩尾をフライングフィッシュオルフェノクは拳で思い切り殴る。マンティスオルフェノクはオルフェノクの変化が解け、人間の、木場の知る青年の姿に戻る。フライングフィッシュオルフェノクはその青年を肩に担いでオーガの方を向く。

「ファイズでもカイザでも、ましてデルタの特徴とも合わない……。まあ、何なのかは知らないが、今はお前の相手はしない。それに戦力は多い方がいいからな。また会えたら会おうか」

それだけ言つて、フライングフィッシュオルフェノクは『遊泳態』に変化し、青年を連れ去つて逃走した。その速さ故、オーガのオーガストランザー、もしくはオーガフォンによる銃撃が出来ず、逃がしてしまった。

「逃げられた……」

オーガストランザーを拾い上げ、ミッションメモリーを元に戻し、短剣状態となったオーガストランザーを腰のホルスターに戻す。後は変身解除……と言う時に。

「待ってくれ!」

誰かの、女性の声が後方から聞こえた。オーガが後ろを振り向くと、そこに立っていたのは人里の守護者、上白沢慧音。彼女は人の避難をしていた。だから戦いの場には顔を出せなかった。そして来てみれば黄金の戦士1人、という状況だったのだ。

「お前は…何者なんだ？あいつ等…オルフェノクとは何なんだ？」
「……………」

正体を知られれば紅魔館にも迷惑がかかる。オーガはその場を無言で立ち去ろうとした。そんな彼に慧音は、1つだけ質問をした。

「せめて、名前ぐらい教えてくれ」

名前。ファイズギアならファイズ、カイザギアならカイザと名乗るように、ギアの名前がそのまま鎧の姿の名前になる。だが木場はこのベルトの名前を知らない。つまりこの姿の名前も知らないのだ。

「…さあ。俺も知らない」

「いや、それは…って待て！」

慧音からしたらはぐらかしてる様にしか聞こえない台詞を言って、その場を立ち去る。慧音の待てという言葉も聞かず、オーガはその場から立ち去ってしまう。

「……………何者なんだ、本当に……………」

1人呟く慧音。だが慧音は、すぐさま倒れている人達に駆け寄る。オルフェノクが撤退した事により、避難していた人達も戻ってきた。

人里の近くの寺。「命蓮寺」には人が集まっていた。毛布などを敷いて、そこに寝かされている怪我人。治療を待ち、痛みを堪えている人。お互いに大丈夫か？と心配しあったりもしていた。あまりの怪我人の多さ、一か所に固まって治療してもらった方がいい、という理由で、命蓮寺に怪我人が運ばれたのだ。命蓮寺の僧侶兼魔法使いである「聖 白蓮」は此処を使う事を快く了承してくれた。

「さすがに、人数が多いわね」

慧音によつて命蓮寺に呼ばれた永遠亭の「八意 永琳」その弟子の「鈴仙・優曇華院・イナバ」によつて、怪我人達は治療されていたのだが、マンティスオルフェノクの被害者は多く全員にまでは手が回らないため、重症患者から診て行っている。以前にマンティスオルフェノクが暴走した時とは違い、今回はかなりの被害者が出ていた。

「すまないな、わざわざ来てもらって」

慧音が永琳に話しかける。治療を行いながらも永琳はその言葉に應對する。

「別に問題は無いわ。むしろ問題なのは患者の数。流行病とかならまだ分かるわよ？でも怪我人がこんなに出るなんて……。まあ、何があったのかは後で聞かせてもらっわ。今は治療で手一杯なの」

「ああ。…む？」

慧音がふと、命蓮寺の入り口である門に目をやると、2人の大人を

担ぎ上げた執事のような格好の青年がやって来た。青年は慧音たちの方に歩いてきた。

「これで、全員ですかね」

「すまないな、木場。お前にまで手伝わせて」

その青年とは木場勇治だ。人目のつかぬところで変身解除をした後、怪我人を命蓮寺に運ぶのを手伝っていたのだ。

「いえ、別にいいですよ」

笑って言う木場だが、心の中では笑顔の1つも作れなかった。人里の被害、木場が会ったあの男性含め、数名は既に死亡が確認されている。そんな状況で素直に笑える筈がない。

「…あら？貴方…もしかして…」

永琳が木場の顔を見ながら、ふと、何かに気付いたように呟く。永琳と木場は今が初対面だ。木場はずっと怪我人を運んでいたし、永琳も治療に集中していたからだ。尚、話こそしなかったが、木場は既に白蓮とは顔を合わせている。

「ああ、永琳殿はまだ知らなかったな。彼は木場勇治。紅魔館の執事だ」

慧音の紹介と同時に、木場は軽くお辞儀をした。永琳は自分の名前と住んでいる場所だけを言い、木場の顔を見ていた。

(…間違いない。あの時の彼ね…まさか紅魔館で執事をしているなんてね……)

心の中でそう呟きながら、怪我人の方に向き直り、永琳は治療を続けた。

「木場、君は帰ってもらってもいいぞ。君が言っていたオルフェノクとやらが出た後、それに以前文の新聞で見たが、紅魔館も狙われたそうじゃないか。一応戻った方がいいだろう？」

「そうかもしれないですね…」

木場は怪我人達の方を不安そうな顔で見た後、慧音と永琳に頭を下げて命蓮寺から出て、紅魔館へと帰っていった。

幻想郷の何処か。スーツの男の前で、黒い革ジャケットの青年が肩に担いでいたマンティスオルフェノクの青年を地面に捨てるように放り投げた。

「ほう、その彼が『アタリ』ですか」

「ええ、一応戦力にはなると思えますよ」

オーガとの戦闘のダメージが残っているのか、地面にぶつかっても青年は起きる気配が無い。

「彼が我々に反旗を翻す事は？」

「無い、でしょうね。無自覚とはいえあれだけの人間を傷つけ、中には死人までいたんですから。こいつに残された道は1つですよ」

黒い革ジャケットの青年の半分笑いながら言った言葉を聞き、スーツの男はニヤリと笑った。そして一瞬何かを考え、言葉を発した。

「では、彼の『教育係』も貴方に任せます。期待していますよ」
「分かりました。せめて『捨て駒』程度には育てておきますよ」

再び青年を担いだ黒い革ジャケットの青年は立ち去ろうとした、だが何かを思い出したようにスーツの男の方へと向き直る。

「ああ、それから。紅魔館に向かわせた奴を倒した奴らしきものが現れました」

「ほう？それで、変身者は？」

「いえ、そこまでは……ただ、金色の姿をしていて、話に聞いた事のあるファイズやカイザ、デルタの特徴には当てはまりませんでしたね。それに戦闘を見た感じ、力はかなり大きいみたいでしたよ」

それでは、と黒い革ジャケットの青年は今度こそ立ち去った。それとほぼ同時に、スーツの男の横から学生のような青年が現れる。

「本当に使えるんですか？『オリジナル』ですらないのに」

「ええ、オリジナルでなくても強さ次第では戦力にはなりますよ。それにオリジナルを待つよりもこっちの方がずっと効率がいい」

オリジナルとは、オルフェノクによって殺されたのではなく、自殺や事故死のようなオルフェノクが関わらずに死んだ者がオルフェノクとして蘇った時の事を言う。その力は通常のオルフェノクを上回っている。木場はオリジナルのオルフェノクだ。

「それに、オルフェノク化した幻想郷の住人の1人目ですからね。幻想郷支配の足掛かりとも言える事です」

「まあ…確かに」

スーツの男は「フム…」と考え込む表情となる。

「それより気になるのは、その『金色の戦士』の方ですね」
「カイザは金色っていうか黄色ですからね」

スーツの男は「やはり、彼女の言っていたオーガ…」と呟いた。横にいた学生のような青年は「またオーガですか？」と言いたげな顔をしている。

『オーガ』とは何なのか。それはこのスーツの男達も、木場すらも知らない事である。

一方、幻想郷の某所。少なくとも人里からは距離がある場所。黒い革ジャケットの青年は地面に置いた青年の顔を何度も叩いていた。

「おい、起きろ。起きろ！」

青年はゆっくりと目を開ける。目を開けた時に目に映ったのは黒い革ジャケットの青年の顔だった。それに驚いた青年は勢いよく立ち上がる。黒い革ジャケットの青年は立っていたため、ぶつかるとはな事は無かった。

「アンタ…誰だよ…」

「人聞き悪いねえ。折角お前を助けてやったのに」

警戒心を隠さずに言い放つが、黒い革ジャケットの青年は普通に受け流す。一方の青年は、助けた、という言葉聞いて

「…どういう意味だ」

と質問する。彼は自分がオルフェノクである事は自覚している。そして、先程まで意識が無かったという事は、眠っていたか暴走していたかのどちらかであろう。そんな事は青年にもわかっていた。

「どういつって…こついう意味だよ」

黒い革ジャケットの青年の顔に不思議な模様が一瞬現れる。それを見た青年は驚愕。指を差しながら大声で言った。

「アンタ…オルフェノクとか言う奴か！」

「ああ、お前と同じな」

黒い革ジャケットの青年はニヤリと笑い、次の言葉を発した。

「なあ、お前は意識が無い間何をしていた？」

「…知るわけないだろ？」

知らないとは分かっていたが、念を押して聞いてみた。やはり何も知らないようだった。そしてこれは、黒い革ジャケットの青年にとつては好都合であった。

「じゃあさ、教えてやるうか？お前が何をしていたか」

青年は戸惑いながらも首を縦に振る。もしも、自分が暴走していた

のなら、一体何をしていたのかが知りたかったからだ。自分が人里を襲うという事を繰り返していかないかを知りたかったから。そしてこの後、自分の犯した「罪」を見て絶望することになるとは、青年は思ってもいなかった。

…いや、もしかしたら、「思いたくなかった」のかもしれない。

蠅螂の暴走（後書き）

久しぶりの更新となり、相変わらずの低クオリティです。それどころか話数が進むにつれてクオリティが下がっていくような…。

今回の話ではあまりストーリー自体は進んでいませんが、マンティスオルフェノクの「青年」が色々と大変です。幻想郷1番目のオルフェノクという事で、他のオルフェノクよりもちょこっと出番が長いです。

何だかんだで命蓮寺、永琳が初登場です。白蓮とウドンゲも台詞こそありませんでしたが、一応登場という事になるのでしょうか？

そして全く出番のなかった紅魔館メンバー。フランに至っては…きゅっとしてドカーンされても文句は言えないでしょう。

キャラクターの心理描写などが難しく、後100年は鍛えるべきだと痛感します。

遅い上に、こんな文才の無い小説ですが、お付き合いいただければ幸いです。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3385u/>

東方地帝馬 ~地の帝王、幻想郷へ~

2011年10月28日01時12分発行